樺太概覧 一

麟

特別
カ 5
4887

乙第九百九十三号

樺太事件出数書類丸山作楽所蔵中取調候様騰写ニ差出方申来候之通都合七本郵差進候也

九月廿五日

外務大丞

内史御中

早稲田大学

外務省

亜墨利加合衆國ミニストルレシデント
ヱキセルレンシー
ワルビワンワルケンボルク江

以書翰申進候我國与魯西亜國与樺太島境界の義ニ付先般外國奉行小出大和守を使節として魯國都府へ差遣し候處同國委任の亜細亜局ジレクトルスツレモウーホフへ

従而今般別紙親睦書交換致候旨
大使帰國の上我政府へ差出候ニ付別
紙親睦書写相添此段御報知申上候
拝具謹言

慶應三卯年七月廿一日　小笠原壱岐守　花押

各国公使へ同文言

樺太島親睦書写

カラフト島ハ魯西亜と日本との所属なれ
ハ島中にある両國人民の間に行違
の生せさる様至誠の處置を為し永世の懇親
を結ひ度くまてんかためにして日本政府ゟ右島
中山河の形勢に従ひ境界を議定せん
事を望む旨を日本大君殿下の使節ハ
サンクトヘテルブルクへ来り外國事務役所

に苦心ありしと雖とも魯西亜政府も
島上にて境界を定むることは承諾い
たし如此事に敏鋭亜細亜局ヂレクトル役名
イニークウエツニク官名スツレモウーホフ名人をして報告
を以て政の巨細を大君陛下の使節へ
陳述せり且魯西亜政府も右如ら好ま
島の事件ゆゑ親睦の交際を保たん
事を願ひ好意を述たり

外務省

第一条

両国の間に在る天然の国界アニワと
唱ふる海峡を以て両国の境界と為
しかるへき全島を魯西亜の所領と
定むへし

第二条

右島上に于て方今日本人の住家漁
業場は向後とも従来の通り

外務省

其所領とすへし

第三条

魯西亜所属のウルワブ島並近傍にあるチルボイフラワトチルボイフロトンの二島乃小島并其外日本地之議定全く是迄の通なき日本所領とすへし

第四条

右條々両國議論落着まてからふと嶋ハ是迄の通両國の所領と据置へし

前文の趣互に協同さゞるに付からふと島ハ是迄の通両國の所領たる為に並且両國人民の平和を保たんか為め左の條々を假に議定せり

第一条

からふと島に於ゐて両國人民は睦しく

外務省

誠意に交際致し第一争論ある歟又
は不和の事ある時は裁判は其所の双方
の官人共に取計ふへし若し其官人にて決し
難き事件は双方近傍の奉行にて裁断
可致事

第二條

両国の所領たる上は魯西亞人日本人
とも全島往來勝手たるへし且いまた
建物並園庭なき所か総て產業
の為に用ひさる場所へは移住建物
等勝手たるへし

第三條

島中の土民は其身に屬する處の
理並自分持之品ともに全く其
ものゝ自由たるへし又土民は其ものゝ
承諾の上魯西亞人日本人ともに其ものを

外務省

産ニ於ても其場合し若日本人又ハ魯西
亜人へ対り其民金銀或ハ不動産を追
脱して借受し能ハ又ハ現ニ借り置たる者
あらハ其の金の上ニ於て定めたる期限の
間勝業或ハ仕役を以て其返済を償ふて
之を許すへし

第四条

前文魯西亜政府ニて述ある旅意を
日本政府ニ而若向後同意し其所存
報する時ハ右ニ付更ニ談判議定ハ互
ニ通信の来往ニ合すへし

第五条

前ニ掲ける規則ハ樺太島上ニ於て双
方長官交換の時より施行すへし但
し網市漁ハ六ヶ月より延滞すへから次
且此規則中ニ挙けたる頭条の事ニ付

外務省
外務省

互に見せ合ひ都て双方の長官是迄之通
取扱ふ可し
右條々ハ双方全權委任之上の此
假規則ニ姓名を記し調印せり此
ハ双方の譯官名判を記し尚英文を
副へたり
日本慶應三丁卯二月廿五日　即魯暦千八百六十七年二月十八日
於比特堡

小出大和守　花押
石川駿河守　花押

柯太槩覽

一

柯太槩覽二編巻之二十六

目録

一号ヨリ十号マテハ丸山作樂柯太關係以前ノ事件ニ付略ス

十一号
一勅諚并台命

一委任状

十二号
一八月九日於東京運上所岩倉大納言鍋島従二位澤外務卿大久保参議寺島外務大輔大隈大蔵大輔ト英國公使パークス對話

十三号
一外務卿ヨリ柯太出役人数ノ儀ニ付廻章

十一号

勅諚

今般北海道出張不容易艱難大儀之事ニ候其成否

皇國之汚隆關係候間各同心戮力シテ勉勵從事

可奏其功旨御沙汰候事

明治二己巳年九月

開拓使
石

台命

一北海道ハ
皇國之北門最要衝地也今般開拓被
仰付候ニ付テハ深ク
聖旨ヲ奉體シ撫育ノ道ヲ盡シ教化ヲ廣メ風
俗ヲ敦スヘキ事

一内地人民漸次移住ニ付土人ト協和生業蕃殖
候様開化ニ心ヲ盡スヘキ事

一柯太者魯人雜居之地ニ付専禮節ヲ主トシ條

理ヲ盡シ軽卒之振舞曲ヲ我ニトルヘカラズ自然渠ヨリ暴慢非義ヲ加ルヿ有ルトモ一人一己之擧動アルヘカラ必全府決議之上是非曲直ヲ正シ渠ノ領吏官ト可致談判其上尚不可忍之義者
廷議ヲ経全國之力ヲ以相應スヘキ事ニ付平居小事ヲ忍ヒテ大謀ヲ不誤様可盡心事

一殊方新造之國官員協和戮力ニ非サレハ遠大之業決シテ成功スヘカラサル事ニ付上下高卑ヲ論セス毎事己ヲ推シ誠ヲ披キ以テ従事之決テ面従腹非之義有ヘカラサル事

明治二己巳年九月

右大臣

委任状

丸山外務大丞
谷本外務権大丞　江

樺太出張之上魯人ト応接之儀者本條約并小出大和雑居之約束を導キとして談判可致若不行届候ハヽ魯之開拓長官来住之地迄差越及談判可申候尤従前之両條約ニ違背せさる且和親を重ぬる趣ニ益行ハる廉も増加いたし候共差支無之ニ付御委任之事

外國人ゟ書翰往返并彼地是迄之形情ゟ
詳委ニ相認便宜次第差越可申候事
但外國人之方彼地情實詳悉ニ而兎
角内地之報知遅延疎漏ニ相成候ニ付右之
通弊を踏ミ無之樣可致事
右之条々可相成事
明治二年己巳八月八日
澤外務卿
花押

八月九日對話 明治二己巳年

一應接畢而

一兆猶延遅館ニおゐて御談判ニ而申候蝦夷地之一条早々御評議有之候趣如何

御評議相成候哉

一右ハ是迄之談判向専ら取調中ニ有之候、尤結末之處ハ雑居申事ニ相成居候一体今般一新以来百事共速ニ運ひ候付候積ニて同處へも猶自ら人民差出され

外務省

候丈ケハ不遠差出候積ニ有之候
一先年魯国ゟ之御談判向唯今ニ至り候
段ニ取調ニハ及ひ申間敷候
一さして手ニ取と候事ハ有之間敷候得とも
丈ケ取調中ニ有之候
一右之儀面會ニ相成居候事ゟ存候
一右様ニ候尤其砌之扱候者ニ丈ケ取計申ニ
有之候
一御面會ニ相成候者ハ説得も出来候得共
口上之論ニ而後日之説ゟ出来不申候

一箱館之士官ト土人より申立之趣有之候由
右ハ如何様之儀ニ申立候哉
一魯国人中ニ出候ニ付同国政府之命を奉し渡
航候事住居可致目論見ハ無之候旨申立
候ニ付此方ニ而ハ其政府之命を受出張ハ無之
居候旨當今右様之事ニ候而ハ不相成ゟ申答
候而已ニ有之候
一雜居之申ニ付治定相成候上ハ雜居之
命を奉し相越候趣を主張ハ無之候
事ニ哉有之候処去ル御国人を追払ひ候様

外務省
外務省

之処置ヲ以テ墓有之ニ付
一先祖之事ハ霊之候得共墳墓有之場處或ハ
田畑畠中ノ場ニ而取除キ家作可取建ト阻
ハ為致候所土人委ク怒リ許シ不申候趣ニ有
之候
一何人程参リ候哉
一弐百五十人斗リ出申事ニ候得共其後ハ不
存候ニ参リ候趣ニ候
一昨年も同処ト参リ候趣ニ承候
一昨年ハ不存右場處ハ当年始テ参リ候

一夫ヨリクヒユンコナイニ可参ト候クヒユンナイセクヒ
ユンコタンニ聢ト多分ハ相違ニ有之候クヒユエコナ
イト参リ候処三ケ年以前クヒユンコタンヘ参リ
候処九ケ年以前ニ有之候一旦クヒユンコタンヘ往
居候節其後同処ヲ引払候参リ申候
一右等之手続ヲ以テ調候故不相分候
一外ニ何存知之方ニ而有之候
一右之手続聞候者ヲ於浦兵庫ト申者旧幕
之節箱館ニ而参リニ有之旧人心得居候ニ付今
般呼出シ候處一家初ヨリ之手続ヲ調ニ而為聞候

駿地ニ差遣候處右之者同府ニ於て承候得共

委細承知可申候

一八九年前ニ条約一旦引合又ニ改条約

候以前引合候節之事柄ニ而承知無之

候哉

一一向不存候

一但國内之儀ハ能存知罷在候得共之

と存候

一右之趣ニ取扱候處右之儀ニ変り既ニ同政府

ニて義合相談致し候事故最初ニし手柄

心得候もの無之ニ付取調之爲兵庫浦兵庫表

駿地へ遣し来ル十二日頃ニ者帰府之積りニ

一付委曲承り紀し是迄國ニも談判以前ノ文面

國々當該引合之筋も可有之候得共差向候處

ハ人民随身方位是非立以前ノ居候事

ニ候

一支ハ如何様之人物ニ候哉

一開拓之爲め之役々外務取扱之者等夫々差遣

し候積ニ候

一何之處ニ差遣候哉

一クシユンコタンヘ遣し候積ニ候
一唐太島之絵図面可有之候
此時絵図面差出し談判
一古之分ハ委細ニ御承知有之候ニ付大也談判
向ムケ肝要ニ存候一体此国内之地を御存
し有之筈ニ無之事と存候
一エトロフ、クナシリハ魯国のものと認思召候哉
一不残此方之物と存居候同所獲り之との日連
山猶更委細相分り可申候差向候所ハ従今後
々并人民随而方等差急キ居候事ニ而当

一今其処置可致手始ハ如何居候
彼方より絵図面取出し
一古之処ハ兵隊訳ニ人様大砲等据置候ハ何
之為ニ而候哉魚猟之為メニ候ハヽ様ニ処置致
し候ニ付有之可致候
一唐太島大ニ開キ候計りニ有之家ニ初同
所を始メとし猶ニハ蝦夷地之方迄及ひ申し候
却も難計候ニ付候
一蝦夷地を取奪候与御都合宜敷候哉
一取奪候而ハ勿論有之候ヘ共夫是心配尽力

いたし兼候事ニ候

一ツーヤ方ハ余程大切之場所ニ有之候処私書記官以前同處ニ而難渋いたし候ニ付同所等一洗いたし候得共御取締向等更ニ無之候

一先最初ニクシユンコタン等開き同處ニ而夫ゟ取建次ニツーヤ辺開 既ニ積り有之候

一唯今ニ至り唐太を御開ニ相成候ハヽ御遅延之事と存候

一最初中々道ニ至り政府之命をまもし候

申立候許ニ付遅延いたし候中ニも有之可申候

一同処ニ差出置候百人余差出し置候得共全く手配無之候ハ御返し役人等候得共住所ハ有之可申候

一右之百人一家ニ住居候得共場所ハ有之可申候得共尚少し之家屋も有之旦々許多く住處も未建候積りに付

一右七百人と差出百人と至り相弱居候而宜敷と思召されし候外

一唯今何人ゟ申候ニ付差出し候得共先差留り右様之人員と申候ニ付而し候

一魯国之多勢之御国之少勢ニ而多少雑
居候而ハ不都合之儀ニ可有之事ニ付勘
考ニ及候
一右之儀ハ小出大和守魯西亜都府ニ於而談
判之砌雑居之儀ハ後来不都合を醸し可申
旨精々談判致し置候得共彼方承引無
之ニ付是非談判いたし纏め候ニ付何とも
再應談判及ひ候心得候
一夫ハ何とか〆ハ談判可致候
一魯西亜政府との談判ハ不致

一同國之儀ハ談判之上ニ而縁ハ最早七
一ヶ年ニ相成申候千八百六十二年同国
ら境界之談判之儀約定有之彼方ニて
土民ニ官員差出し並相待居ニ年ニ
及ひ候へとも御国より之官員ハ差向不
之ニ付遂ニ引戻申候
一文久ニ亥年方之ハ能ニ有之候へとも今般我方ニて
八遂ニ一情理を立談判及ひ候積りニ候
一十一ヶ年以前ニも矢張情理有之今
般ニ至り候而ハ矢張同様之事ニ候

一彼我雑居ニて葛藤を生し候節ハ別
段之支ち有候

一假令ハ火業ニ火薬相混し候茂因採
之事ニよりて燃発可致候、

一彼方ニ暴挙有之候得ハ曲ハ彼ニ有
之候

一商人とも互ニ平穏住居致得ハ差支無
之候

一唐太を先ニ而間込来候ハ住居之而根
計りあつて礎ニ之兆申ニ而ニ有之候

一同處ニ而魯國人ニ来りしニ付唐太を先
キ間込ハ事まて蝦夷地を著渡致と申
すことニ而之候

一先ニハ同時ニ而両所を御開ニ相成

一先差向唐太之方ニ而力ハ争ハ積りニ候

一素より私開係ニ之事ニ付御話し致
ハ計りニ候

一御心得之廉ニハ御彼縦野ニ改府ニ
於ても蝦夷地之事ハ大ニ件ニ致心配積ニ
而力ハ争ひ居候得ハ追ニ御談判ニ及ひ候

迄可有之候得共未タ取調中ニ付尚御
心付之廉等承知いたし度尤九月上旬ハ
渡海も出来兼候趣ニ付至急役々差遣
し候積りニ而漸く手續ヲ取ニ罷居
候事ニ候

一御國内之事ニ而私見込之義申上ルヲ
八重之候へとも治定ニ有之候得ハ格別
之事ニ候

一右之處ハ此程御談判中ニ而當今公使ニ而
面晤ニ來有趣ニ付委細御内談有之ニ廉

太島之儀ニ付而心附之廉ニ而可有之候
事ニ心得至急之ヲ付而面晤いたし度
事ニ候

一而役々人民等迄いつれ差遣候哉

一九月中旬迄ニ差遣し候積りニ而猶又
都合いたし居候

一而船ニ何程ニ而差出候哉

一船數等未治定不致候得とも人員ハ凡そ
四五百人も差出し候答ニ候

一手不足人も差出し候ハヽ食料等余程御用

意見之ヶ条相成可申候

一来年四月ニ至テ用意ハ勿論致候得ハ唐太
ニ於テ物産勿論出所有魯國ニ而も勢力ハ勿論
於て又ハ同所之開拓球辞插致して遂了ハ
蝦夷地之儀追々蚕食ハ勿論へき見込ニハ候之
様右等之儀新聞ニ而も御聞込ニ候得共
之状

一魯國之見込ヲ申出候ハ仮令如何様
之見込有之候とも人情之相違之事ハ不申出
候得ハ同國人之挙動ヲ御勘考有之候方
可然候

一魯國人之挙動を勘考可致事ニ候得ハ恐らく
其南地ヲ出るを欲する事ニ可有之候得ハ
重大之事件ニ付候而各國ニ於て意海
化文明之事ハ承知之勿論居候魯國迄も一ヶ
國之事ニ付道理ニ於て左様之暴挙を有
之ヲ発し唐太之物産出候ヲ有害ニ而考方深
く不存候得とも差向ニ急之事とて人民之
付方之儀緊要ニ付御心付し度事ニ存
致り度候

一千八百六十七年小出大和守と約定之島西更ニ日本之人民雜居ニ申
事ニ候へ共当今同國人集り候而荒追出
し候擁も無之事ニ候
一右雜居ニ申候ニ付確定ニ相成候様ニ無之
反覆弁論を盡し候へ共彼方不承引ニ付
其後俄ニ談判取纏免候計ニ而外ニ
之条約書ニ者ハ大抵之遺有之候
一島國人土着候上ハ追出し候擁き有
之間敷候先般約定之通同國人集り候

又一事ニ付同國之違約ニ有之間敷候
一規則を定免候事ハ後日出来候様ニ候己ニ
右約定后中ニ当土人之住居又ハ魚獵田
畑等之場所を掠奪ハ不致間敷候明文
も有之不境墓或ハ魚干場田畑等を掠奪
し土人も今日之産業ニ差支難渋ニ相成
候段訴出候
一又ハ彼方之不正ニ有之六十七年之御
約定ヲ承り候節ニ支年之間ハ者必
定葛藤相生し可申ニ付存居候仮令

其所の近傍ニ茶屋迄罷越候も同様
の論ニして却て無念の事ニ候一体一ヶ
所の地を両人ニして所持いたし候事ハ
無之答ニして一家屋ニ住人の主有之ゆゑ
左ニ而ハ談論未有之候ニ付候

一先達ニ大和守より委しく談話およひ候
處假令鄰家ニ住居候とも談論ニ費し
候節ハ同様の事ニ有之候得ハ強ひて同國
より離居る事ニ付無余儀談判ニ纏
免りすゝ候

一千八百六十二年双方官員出張いたし出可
有之答之處該國より政府向差支ニ而如何
之訳ニ候哉

一右ハ内國の紛擾ニ而遅延いたし居候處既
ニ平定いたし候ニ付役々出立可致旨箱館の
露領館魯西亜國士出府いたし同處ニ而
同國官員最早引取候趣ニ付不日罷越候
旨ニ大和守同國ニ罷越候節境界談判
の官員不日罷越候段重畳ニ候へとも
今年ハ不致旨申聞候様ニ候

外務省

一彼方ゟ官員差出候節ハ治定致
来候ハヽ都合よろしき事と存候私勘
考ニハ当今此迄まて修畫面ニ以出張ハ筈
居候事ニ付南地ハ十進ミ候跡ハ十退
極中居留候魯西の足迹ハ守紀し有
之候得共唯修算の備ハ営中ニ候近者
之候ニコライストハ魯の兵隊差出候我ハ評
判よろしく雑居候ても百迄も被為得ハ更
ゟり大ひに手を開き候事ニ取引可申
候

一人員并兵営等差出候様致度候
一支那ハ火薬を除き火薬ハ遣候とも中々よろしく
有之候此年も百五十人程四里程偏り
候場所ハ差戻後当年追々差向候ハ
千五百人ニ相成中よろしく候
一支も罷人差出候様
一右ハ兵隊ニて別ニ罷人ハ出し置ニ越よ
候第一不審之一条ハ日本政府ニて
国内の事件を御存し無之事ニ候右様
よろしく候ハ蝦夷地をも奪候とも御存し有之

召成候國人も蝦夷地を遠隔之地と
被思召候得共寔ニ日本の北門ニ有之候
一日本ニも漸く二十年程已来活眼を開き紀
追ニ取調候ニ昨今の一新ニ相成古ニ引
戻ニ不申候場合も候承知有之候事
与存候従是開拓の功を成し申候國別
ニ以而郡を置國しく分割以而相候様
ニ候
賤國而已
一先蝦夷昆布魚類其外物産諸山有之候

一ケ國可相立程之國柄ニ有之然る処私
処ニ旅行いたし候得共曽て道路無
之諸國人も海辺を漸く通行いたし
候計ニ候
一石炭銅其外も可有之候へとも農業の方其
理ニ有之一体同所ハ土性宜敷趣ニ付米
麦も無出来可申与存候
一米も如何成出来可申哉去米ニ
八迚も寒氣ハ凌き難く牛肉并パン
食し候へ共西洋人の通り寒氣を何

迄も不存候先之義ハ海陸之測量
ヲ有之候測量出来候はゝ自ラ隣国
両岸出来いたし隣国両出来いたし
候得ハ旧郡ニ分割方ハ自在ニ有
之候
此方ニも魯国之境ゟヘートル府迄五
千里有之候得とも三千里ノ間用役
いたし候
サカレン之儀心配無之候同嶼蝦夷ハ可為奪
可申候

一蝦夷地開拓之儀ハ不都合ニ候得共貴之
日本ノ地を勝手ニ掠奪以ノ候様(?)し於
ハ有しなから候事ゟ政府ゟし等閑ニ
候事ニ候得共之旧政府まゝ荒蕪ニ心配致し
候へとも中途ニして廃し候ニ付本ニ候ニ
御懇親ノ御誘引ニ為く不後高法開
近ニ出来候はゝ御為両人ニ御申聞之
可有候
一エトロフニ魯人来り候ニ付ハ御承知
候

一 一向不存候

一 十八ヶ月ニ罷成候而も何様私共ニ探り
候而一ヶ年乃至二ヶ年半之後迄ニ而ハ一切私
共不承知候自然ハ彼是ニ付右様之事件有
之候得共一瞬時ニ而其知合ハ蝦夷地
者自然之領地ニ候とも右之候得共懇親之
心底ハ分申上兼申候

一 箱館奉行役私共之所同断より申上之私
共之様自分其私共之図蝦夷地之様子探
索ハ仕せ不申候

一 兼知ハ申候

右之通申上候

八月十一日廻章　明治二己巳年

一　唐太

一　土人撫育出役人数降伏人五百人

一　子モロ

一　同断

一　宗也

一　同断

一　石狩　兵部引受

土人撫育出役人数降伏人男女三百人

外務省

箱館

人撰出役

庄内兵隊一大隊　此外軍務ニ而所置

右

一 兼轄人撰出役之事

取調名付差出候事

一 人数并館降伏人同所ニおゐて兵部より

引渡之事

一 農兵並常出着之事

一 弾薬銃砲兵部より引渡之事

一 開拓器械用意之事

一 冬春中産業手当之事

一 米穀塩噌始十分手当之事

一 厳寒衣体夫々用意之成不洩事

一 人数并諸物運送船数調之事

一 測量外国人雇入并多年人業之何人且

船用意共北〆費等廉々調候事

一 諸雑費算計之事

一 今度引移人数出着之 御付次第候ハヽ追

而妻子引移し事

一仙臺藩元家老三斬（軒）

一水戸

一一ノ関

右開拓書類之上夫々土地ニ與ニ見込之事

右民部大蔵兵部ニ早々打合熟ニ而決定委細届出可申出事

八月

開拓長官殿

丸山外務大丞　開拓御用掛

唐太地出張被　仰付候ニ付為心得申入候也

右之通開拓使ゟ御沙汰相成候間為心得可申旨ニ而岩倉大納言殿ゟ被仰付候間早々申入候事

八月十一日　外務卿

民部省

大蔵省

兵部省 御中

追而早々御廻達御返却之事

一号　二号　三号

柯太槩覽二編卷之二十七

目錄

一己巳九月一日開拓長官ヨリ建言ニ付見込ノ趣
明日中兼度旨大納言ヨリノ廻章

一右長官ヨリノ建言抜萃

一右ニ付外務省見込建白

一同月蝦夷地諸島北海道ト新ニ邦銘ヲ建テ開
拓長官其外官員出張且柯太ヘ丸山外務大丞
谷元外務権大丞出張ノ趣報知ノ往翰

一同月我國人民柯太ヘ出稼願ノ者若干有之ニ

外務省

付為取締官員差遣旨報知ノ往翰

四号

一同月七日漁業場等ニ新規家作取建或ハ伐木草刈等見合セラルヘキ様東善八郎井上干城ヨリ陸軍次将ヘノ往翰

一右復翰

五号

一丸山外務大丞谷元外務権大丞柯太着ニ付報知ノ往翰并復翰

六号

一丸山外務大丞谷元外務権大丞ヨリ柯太到着ニ付言上二通

但見込箇條書

一同斷外務卿ヘノ書翰抜萃

外務省

柯太槩覧二編巻之二十七

九月朔日廻章

別紙樺太開拓長官より被申達候間各省ニ
於而も関係之事件夫々下紙見込相附明日
中ニ返答有之度候渡海之筈来四日五日迄ニ
周旋之儀成丈ケ之様ニ間至急御答被下度候
也

九月朔日

大納言

大蔵省 御中

刑部省 御中

外務省 御中

前ヶ条略ス

長官建白抜萃

一 函館表部ニ於テ官縄船等ニテ四ヶ所沖ニテ口運上不
取立候事

一 樺太ニテ九春古潭ノ内冨港ニ於テ外夷ニテ蛮涎ヲ
差止候事

大主典以下ノ者官禄等地勤ノ人ヲ〆ニ意ヲ
増シ給ヘ度候事

一 樺太 二割増

但シ宗谷根諸ニ准ス

一石狩　一刻ニ不増

但北度数之相等シキニ不准之

一函館　一刻

一魯西亜柯太ニ雑居致シ居候一件等ニ於テ威

武ヲ耀候之取計致シ自ラ皇国之御威光相

立候様ニテ仕候得共万一彼ノ狡黠兵隊ヲ以

暴烈ニ取掛リ候節ハ不及伺時宜次第諸合

之人数ヲ勿論兵隊等ヲ以強而相攘ヒ申彼ノ継

合ペイトルヒロクノ常備兵等ヲ繰出シ攻来

候共臨機之計策ハ可有之候間於

大政官ハ兼而其御仕組有之候事

一帆前　長三十間之船　二艘

一蒸気　長同断　二艘

右函館柯太共外用ニ御買入御渡相成度事

右之条々相伺候処速ニ相伺候ハヽ可有之候ハヽ

得共先ハ書載之通至急御下知有之候様奉願

候也

八月

開拓使

建白

北海道開拓長官ヨリ建白之義ニ付

見込ミ之趣申上候書付

外務省

北海道開拓長官ヨリ建白都合十三ヶ條之

件ニ一覧致シ勘辨仕候處愚意之次第奉申上候

去ル御下問之義ニ付心附候廉々左ニ申上候

前ヶ条略之

第十ヶ條

柯太之久春古丹ニ開港之事

此義萬國之交易市街を開以得き公法於
合之地ニ於而容易ニ魯西亜之交易を蠶食之
患有之候得共兼而右之見込ニ而当以得を存当
柯太を雑居之儀條約之付
皇國ニ而一手ニ而開港之儀取扱き候得共難相成
萬一只今之形勢ニ而開港を相張候ハヽ之吹色
求病之獨（禍）を有之以間此後ハ今暫ニ而見合柯太
之形勢自然之
皇國之版圖ニ海以威力ニ而保有之法を得為之

魯西亜き而論ニ而條約済各國ヘ而於合之上ニ而
程を我方ニ而以て自然開港之様式ニ而相
不申様之様し度事ニ而當以開韓ニ而見合ニ可
之奉存候事

第十一ヶ條

大王典以下官禄割增之事

此節大王典以下ニ不拘奏任以上之もの之ハ曖
雪害ニ居之艱難を患以至相當之而加給相
成以方与奉存候事

第十二ヶ條

柯太瀉島西亜雑居為交際之大意

此節者

皇國之儀安危ニ拘リ候節ニ付不成穏便之取計ニ

相致シ度候今彼方暴烈ニ出候ニ付ても對シ候者

火勢ニ薪を添候節ニ而彼之術中ニ陥リ可

申所謂柔能剛を制すると之理ハ此場合之義と

存旧幕府以来柯太者僻遠邈阪ニ而何事も拋

擲致シ居リ隣國交際之廣ニ失典リ不少條理

上ニ於而も我方曲多ク相生候間今般将挽回を

實ニ至難之大業ニ有之方今其創剏之際

を以経急ニ重事を誤候而者

國家之大事此上なく候間右等之者丁寧反復而

教戒シ之孫彼地在住之魯兵粗暴ニ募リ談判

不相整節者他之各國政府ニ依頼致シ候而

同論之趣ニ而同様魯政府之條理を以應接

及候而外無之候間篤と御勘存

右之条々兼心得以末申上候ニ付外之条々別紙從存

芳葉ニ御座候以上

九月

邦銘報知

以手紙致啓上候、然者我蝦夷地諸港之儀、小海
道之新ニ邦路を建、同所開拓之経東久世正
四位ニ長官之命、其次開拓判官従五位命名館ニ
出張之積ニ候、右港者小海港之内ニ而開拓使管
轄之事、同所貿易事務者右判官ニ引受為
取扱、且樺太港者丸山外務大丞谷元外
務権大丞之者所属役員出張致し候而右外国交
際之事務取扱之事、右者兼而為雑交事務長

外務省

官司ニ於テ取扱ヒ候ニ付外國交際之儀ハ總テ拙者
共ニ相違無之筈ニ付左様御承知有之度存候此段
得御意度如斯御座候以上

明治二己巳年九月　外務大少丞

魯國コンシユル

姓名　貴下

官員出張報知

以手紙致啓上候然者我國内即今之形勢ニ至リ候ニ付
人心稍以折合申候ニ付而ハ我國民之内追
々出稼之義願出候もの若干有之候ニ付
御許容致候處右之者共横濱其外之
民之儀ニ付不都合之儀有之候而ハ右等之民
共彼是交際之人々取締之為メ箱館奉行開拓判官ニおいて
外國事務ニ關係之官員ニ於テ右之者共出張致候
心得ニ候得者御意得度如斯御座候以上

巳九月　日

宮本外務權少丞

馬渡外務少丞

町田外務大丞

魯國コンシユル

タラヘテンベルグ

江

家作取建等止メ方之往翰

明治二年己巳九月七日東召八郎井上干城

より魯客海軍次将に指出し書翰写

以手紙申入候柯太島之義ハ我國北門鎖鑰之

地ニ候今講境和親之國と之人ニ而我

皇帝ニおゐてハ外人と両國雜居之地柄ニ付約

定無之候ニ付旧幕府臣下小出大和守自己之了

簡ヲ以雜居等取約候義今日之政府之於てハ更ニ

不存義ニ付取極事ニ而本文平此地ニ於ゐ

外務省

之箱館書翰ヲ以申入候後當表在留八郎義前
文之次第ニ付及周旋候處通辯之行違有之
探索細ニ述候趣ニ御坐候右ニ付魯國全權之者より
箱館表之内事如何御座候哉承り候ニ付先是迄之通
雑居之儀ニ而萬事不一致ニ付外拙者識
掌之者ニ談有之候全權より雑居之約束遣し
有之哉申越候ニ付右之如何様ニ而も雑居之證文等之
者ニ而近年ニ付右ニ而者極而六ケ敷事ニ付為先是
前雑居之儀ニ付候共其辺之證ニ付得与其筋共
開之後之儀ニ而角ニ我國ニ数年来漁業取開

居在候函館江人一統之所ニ而居候方去人出稼
人居家業取立去人共ニ而慕他ニ付候者之情
手自分ニ而伐木等刈取何れ家作仕候故ニ而如何之義ニ而有之
候欲者居無也雑居之儀ニ付是迄数度申述候儀ニ
付箱館より之儀ニ付六月中函館江人数差出し之
者様子之事ニ付當時東者八名数度引合ニ出
右ニ而無之通漁業之者ニ不相成様山ノ手小高
キ處去人家地より一里余引揚ケ被之新ニ家
作為致候ノ節其筋存候ニ付共以紙氏者之届ニ付候
之子孫之家作等返し候様子存知居候儀

之義ニ付楠間苗割同様廃墟ニ相成候ニ付眼前
之事ニ有之是迄之通遠ニ家作も無纏漸々ニ而得
其後新規之家作等も堅く相断申ニ而右様之
義ニ而渡世出稼人産業難相立漂ひ同所ヲ去
人も退轉ニ而様ニ相成申出人も住別ヲ以去地ヲ退
散仕候而實ニ憫然之至ニ候然ニ右退候出人ニ付
之事ニ付如何ニも新規之家作ニ付伐木等
州等も見合ニ相成候且出稼人共ニ日之内来春
漁業之節方之義掛りニ而ハ漁過ニ付ニ付義
無之ニ付伐木等も御許容之義宜敷御取計有之成度

右申述度尚返答書面を以御依頼致度候以上

九月七日

東善八郎

井上千城

魯國海軍次將

机下

復翰

サカリン島ニ於テ隊長ヨリ カルサコフニ陣営ニ於ル

千八百六十九年第十月二十日

サカリン島日本人役處ノ首長ニ呈ス

當年第九月廿九日東谷八郎 井上千城諸ノ所

書翰ニ関テ此段ヲ述ル

第一條

一魯西亜ニ之政府ヲ定シテ外国政府ニ保護セ

ラレマス

第二條

一サカリンニ於る日本人要用として居るへき部分之
場所を貴國之政府ニ於て曾而無之ニ而行
要ニ無へし

第三條

一都る俄之政府ニ拘らす紀元千八百六拾七年ペイ
トルブルクニ於る貴國之政府極めて為る所之法ニ因て
此島を彼我之便宜ニ定めたる上我より公然と
日本政府ニ於て手を下さる事ニ住居し得
へし

第四條

一裁判事ニ付之書翰之我方より返答せさる
處之来書を請付居ても法掛合事文面ニ
都る處ニ事ニ於て一年ニ拾後至て漫せし一件
を早速ニ可申遣ニ而右之趣き此方ニ於ても返答
在之候事を全体之手続之心得ニ而結末ニ
済而後之定處とせしに於て此事ニ相成候
済させるへし

第五條

一毎子酒之客ニ於る日本高唯一速之海岸を

一 右免られ彼方ニ日本之建家より外出迄し
地ニ我定め置る居処を立へし即ち其形
勢ニ於る我より公鎮之居処ニ家を構ひ木
を伐り草を刈るへし アイノ之塚或ハ家米墟星
発へき之迄侵すへからす 但し彼是ニ而却而彼方を
親ニ保全すへし 若実ニ卒ニ彼之数株のイナヲ
アイノの木標を云 を打倒す事ある時ハ以後右様之儀ニ付
きるハ我ニ穿鑿を用ゐて懲らすへし

第六條

一 我方ニ而建ニ家数何程ニ而 公道ニ而
一 右ニ我入用ニ応へ候へ及ひ何事も建へし則ち日
本之国免ハ及ひ各々奉行之陣屋ニ彼之異
方の所望を識に悟らし置

第七條

一 漁業之儀を彼方ニ於て好み候ハヽ彼是へ
と漁場を与へ西亜人 アイノ人 日本人ニ一般ニ之公
用ニ而事を彼方ニ於て之を相解すへし

第八條

一 我建家ニ林木兵糧及諸器を時として岸迄
積る事ニ付き今般我等より貴方を妨く

一ラ々彼等を於て貴方ハ漁業之障碍を為すへ
き旨なり

一此事件ニ就て来春再ひ談おいたすへく且
一同之合置之標り丸熊親を以てすへし
一毋子泊ニ於ては我等居住する総要所ニ軍
営を築き建ち我軍営之各一所ニ番兵を立
置へし

一晩夕九字後より毋子泊め港ニ於ては何人を
出歩行さゝる事

一今月十七日数個之日本人蝦龍を樺太へ来る
遠家辺へ通りしを見んるへき

一右納細之趣意を糺さんかため寿個之士官を
樺太へ至り請ニアイノ語を以て呼ひ印時小
立退く事を命せり其後久春古丹の案内ニ
之来り貴辺蝦夷人ニ通解を請へり

一彼るゝ文之次第ニ因り以後埋葬する為ニ
夜中日本人魯語通辞のもの連れ毋子泊
の宅居ニ来る事を要す

ボッホルコフニク

陸軍第二等ノ将也

丸山參元着島報知

貴政府安康ノ思ヲ謝スルニ拙ヲ以テス矣今廿二日帰
國ニ係ル投合ノ事ニ就テ今般我
天皇陛下ニ於テ專ラ更ニ公道ニ依テ基キ人地一民
ニ不可私事ノ訓ヲ循リ回府ノ秘政ヲ更メ繋ラ
更ニ除テ各國條約等ヲモ斟量シ為ス拒盟
ヲ尋テ約ヲ重ンシ大信義ヲ海外ニ示シ為立度
以速霄肝ニ
御輔念ニ於テ渡ルニ至ルニ貴國トノ繋交講

孚ニ属シ滿海對峙自然唇齒之地形ニ而
和睦之實然親之情洞達致シ度其段官私
一同素ヨリ所仰望ニ候處今般小海法州岸於テ
為移住将居彼出之民庶ヨリ以テ政廳之特命ヲ
以本省ヨリ我彼ノ在留之吏員差越候様一書
出置ニ付追テ右情實一面知了致シ候處謹而為將
締約之談判續之為丸山外務大丞谷元外務
權大丞等同様所轄ニ而内外之事實在ニ候
情態悉角不致合無之様致シ度存候ニ付
談判之事不及援從打合相成候而萬事

命之含被仰聞候ニ付談判可致候處雜
中不取敢抜粋合宜敷通達之以様ヲ以テ可申述
候合諒以交誼之道相立情好安穏之相運候ニ付
候ニ付我官員家之任責御報効相立
一同幸甚之至ニ候右得貴意候如斯ニ御座候也

九月念六

開拓判官

岡本 従五位橘朝臣文平 印

魯国陸軍次将

手翩䕃島津

座下

復翰

サカリン島日本人役所之首長ニ呈す

一八月廿六日貴辺より和文之書翰を閲了す此服中述ル我等之政府を変して日本と交際之親を破壊せしむる事なし却而我之条規奉せし訓書之指趣を為之平穏ニして且慈愛深し

一我方ニ而ハ殺小之不行届ニ而貴辺と双方評議之上決定いたすへし

一当場貴辺共民之役所を婦事を我ニ

方にては実に公道にして且至極之儀ハ常に請
せし事なし
一貴国及九州外務大丞殿答元外務権大丞殿
ゟ出張之華士より承知せり
一函館にて我等之行事及報告を貴国と交
際する隔意を抱かす
一昨年商久米丹へ兵糧を積来りて亜墨
利加之帆前船より日本之戦争ある揷採之風
聞ある事を我伝承せり
一右様之風聞を全く之浮説として東京政

府と交際致し度貴国ハ欲するなり
一是をもつて我方より相違なく定約面之ケ条ハ
随ひたる事を貴国ニて信用せられんと希望
するなり
此段謹而貴下に面接を請ふ

陸軍次将(ポツトフホルコートニツ)手觸荒鳥津(デーフレラードイツ)

於サカレン隊上弐百拾七号書翰

巳十月二日

外務省

着島言上

従五位守外務大丞臣作樂

従五位守開拓判官臣文平

正六位守外務権大丞臣道之

誠恐誠惶頓首々々謹白

即吾嬬行宮御寓天皇陛下萬機修整賢輔良弼簇

々如雲

皇化及遐邇生靈安富臣等誠恐誠惶謹奉遥賀臣

等重陽辞　闕下即夜上洋西艦明日至横濱滞

泊三日越十三日發横濱海上三百里經四日越
十六日過箱館碇泊四日越十九日解纜入北海
又四日而達樺太國曲毛郡楠子潭夫此島門距
莊耶凡五十里沿海負山全島之人皆蓄髭鬚穿
海豹皮履容貌質樸頗有大古之風臣等既臨其
地告土人以
天皇陛下即
天照皇大神之神孫而宇内無上之至尊仁德聖明
雖若荒陬莫不被其
皇化矣故遣吏以按撫子養天下萬生遠迩無不至

矣且賜以巵酒土人聞臣等之言感泣不自持老
壯群聚爲臣等灑掃道路運輸輜重擷蔬割鮮以
饗臣等及諸官僚属以聊呈其微衷臣等亦懇諭
聖旨又接魯狄其往復別作一卷臣等既在五百
里外尺素難盡情實故遣堀大主典基東大主典
重威宮本權大錄讃敢以奏時情誠恐誠惶頓首
々々臣等拜表以聞
己巳十月朔日

丸山答元ヨリノ来書

以書状致啓上候、寒冷弥増候処、愈御堅固被成御
勤務珍重御儀奉存候、陳者卑官儀去月十二日横濱
開帆、同十七日函館入港、同所ニ而碇泊欠之不
足等更ニ御買上之取計、同廿二日亜庭湾之内久春
古丹ニ着港致シ、当地之儀於東京伝聞之趣と
大違ニ而全ク内地ニ異リ、本々宰晴共続一同拘魯
人雑居之儀ニ付、殊ニ規則面ニ背キ候不少不叙
合之処ハ不少、追而談判之上 御國威

御座候様十分尽力可致存候尤此度堀清之丞
東幕八郎宮本都之相廻し候間巨細之事情ハ
可承候且取調候別紙見込書一冊上候右ニて得ハ宜如
形ハ御座候也

十月朔日

宮本権大丞

丸山大丞

寺島大輔殿

町田大丞殿

黒田権大丞殿

馬渡少丞殿

菊池大少録殿

御当地表御渡波覚周旋致し呉候間御
席之刻無拠失生之儀も可致通候様本
希候

一当地裁判所并運上所ニ相渡候日ハ丸ハ経
費二濃ハ調ハ足し方可強ハ升て承り候此段
ハ都中候以上

一別紙上申書并政府行書簡共ニハ執達可
致下候

一樺太官員宅状ハ破達方ハ都中候

一拜表認方出帆前ニ而怱忙ニ而綴蕪字之上
走筆之事故文章不修飾シ紛雑ニ而間
々篇削宜敷御清書之程奉希候且治不地
面略御覧之上是又太政官ニ御差出し可
然存候

見込箇條

見込申上候條

一當地ノ儀存外氣候宜敷内地與格列變候儀モ
無御座候海ニ魚類昆布多キハ不申及陸ハ一
面樹木間ニ大木有之草菜長シ菜大根等見事
ニ出来申候是ヲ以考候得ハ穀類成熟相違無
之追々ニハ沃野トモ可相成加之金銀石炭モ
不少候得ハ漸次開拓之上ハ莫大之御國益可
有之ト私共一統大喜仕居申候如何ニモ開拓

外務省

果敢取候様仕度奉存候
開拓ノ上ハ御国益有之義必定ニ候得共差當
リ夫レヲ以内地ノ用需ニ供セレ杯ハ以テノ
外ニ御坐候方今ノ勢我此地ヲ占ル時ハ内地
ノ藩垣即至要ノ地ニ候魯狄此地ニ據ル時ハ
變シテ我至害ノ地ト成申候故ニ此擧内地用
需ニ供スル物ヲ覓ルニ非スシテ害根ヲ除ク
ノ擧ニ御坐候然レハ此地ノ用需ニ供スルハ
不及申年々若干ノ金穀ヲ不可不費カ不費シ
テ害ヲ除ク目哩（ヨリ）ハ無御坐候抑今日カヲ費シ

害ヲ除クハ他日大利ノ起業本ニ御坐候
一此地先年来所々ニ運上所ヲ建租税ヲ收入来
候儀ニ有之魯狄ト經界ノ事ハ十年前彼ヨリ
コソ申候今日ニ至リ我ヨリ經界ヲ正スノ理
ハ無之果ハ經界ヲ正サハ是地ヲ割テ彼ニ與
ルニテ經界ヲ正スト申モノニハ有間敷候且
又雜居ト云ヘハ我墓間ニ彼カ牛馬ヲ牧シ我
戸前ニ彼カ厠ヲ置クケ様ニテハ（推シ）引モ不可為
是宇宙間決シテ無キ事ニ御坐候然ハ經界ヲ
正スハ勢ニ於テ無之事雜居ハ理ニ於テ無之

外務省

候事ニ御候

一魯狄ト條理ヲ逐テ談判スルハ勿論談判ノ條理而已立候而實事無之テハ無益ノ義ニ付人員ヲ陸續遷移シテ彼ヲ壓制ナシ我ヨリ逐サレトモ彼自ラ退キ候樣仕度奉存候

右之通ニ候間何ニモセヨ人員繰込ヲ第一ノ急務ト奉存候山海千萬ノ物産モ無人ニテハ擧リ不申依之工匠ハ勿論降人遊民乞丐屠兒僧侶ヲ不擇陸續相移シ申度内地ノ遊手ヲ減シテ此地ノ人種ヲ増スハ一大計ト奉存候

一今般兩州ヘ官府ヨリ御手ヲ被為着候上ハ斷然兩地トモ請負人御廃止ニ相成松前箱舘坂田新瀉七尾三国ノ諸港仙臺津軽南部秋田等ノ豪冨ニ引合問屋職被　仰付官船或ハ商船ヲ仕立兩州ノ諸産物ヲ輸シ兼テ問屋ニテ必用ノ器械調度買込貿易致シ戻リ船ニ積込兩州ヘ送致シ毎年時ノ相場ヲ以通計筭用過不及ヲ補フヘシ且米穀ハ兩羽五陸最寄ノ藩縣ヨリ毎歳何程ト相納メ右船ニテ搬運致候樣有之度穀貨トモ一向ニ東京ノミ仰キテハ至急

外務省

用辨相立サルノミナラス費用モ亦夥敷大不
経済ノ義ト奉存候
一此度洋西艦ニテ罷越候処日々莫大ノ運賃具
航海中不都合之件々不少積荷紛失狼藉実ニ
困申候内地ノ船蒸氣風帆各三隻測量術精練
ノ者并航海ヲ傳習スル書生等乗組セ御遣シ
被下度候
一此地ヨリ西ハ鵜城西冨藍東ハ小實白滑運送
ニ船艀無之甚困申候ニ三百石積ノ船数艘御
遣シ被下度候

外務省

一此地船少ク候故本艦ヨリ荷揚手間取日数相
掛ケ萬苦心仕候倉入レ之人夫少ク候故荷物
ハ濱辺ニ露積シテ夜番仕候事共難渋御察可
被下候此間中晴天続故押々相凌申候右等入
用ノ船数艘車二三十輌并車工船工御遣シ被
下度魯秋ハ馬車ニテ材木ヲ運居申候
一前段申上候通ノ氣候ニ御坐候間作付ケノ種物
左之通御遣シ被下度候
一籾種　種稗共
但早稲　東京在ニテ戴合半ト唱ヘ候品可宜与
申事ニ御座候

外務省

一大麦　小麦　裸麦
一粟　黍　稗　蕎麦
一大豆　小豆　空豆　究豆
一油菜ノ種品々
一琉球芋是ハ如何ト奉存候得共試申度候
右之通御遣被下度候
一古着古陣羽織古膳椀等ヲ始メ何品ニ不因陋
汚ノ品々御送可被下此度積入ノ古着ハ千枚
ニテ代金貳千両ト有之此地ニハ好過キ候様
奉存候間成丈下直ノ品御遣シ被下度人員器

物トモ内地ヘ棄物ハ悉ク此地ヘ御送被下候
様奉存候
一北海道本府遐方ニアリ候テハ號令行届兼候
候ニ付長官箱舘ヲ引拂ヒ石狩ヘ轉居被致同
所并松前共之レヲ薩肥長土ノ如キ強大藩ニ
鎮守命セラレ其南州東部ハ函館西部ハ松前
ヲ控キ物貨欠乏ノ資ニ充テ願出且御割渡ノ
大中小藩ハ不及申縉紳并二三万石以下ノ諸
藩旧領ノ年入ヲ究行皆悉ク轉封被　仰付且
降伏人負都テヲ其地ニ遷シ常備兵勢ヲ以平

生農事ニ就シメ南北両州緩急ノ事ニ當ラシムヘシ是漸次ニ進入スルノ道ニシテ繁襍ノ累ナク自然ト風土ニ慣レ地理ニ熟シ嚴冬沍寒ト雖人物ヲ損傷スルノ憂有之間敷且松前候ノ如キ数百年来蝦夷ヲ駕馭シ来能其情実ヲモ覺悟致シ候事故轉封命セラレ今迄ノ現石高一倍増御究行ニ相成唐太國中開拓ノ功立候土地ヲ被下置開拓次官ヲ以唐太ノ國嶮要ノ地ニ治所ヲ開レ伊達須原ナト申請負ノ義ヲ廃シ新ニ問屋職被仰付右附属ヲ以テ手助等致シ且内地名位アリテ實職ナク其人有テ其地ナキ諸縉紳ノ廃孽両本願寺ノ如キ名刹大寺及諸藩ノ子弟中下大夫以下諸藩附庸之名族巨室大凡千石以上分悉ク北州ニ移シ勝手ニ開拓致サセ度左候ハヽ両州トモ其成功速ニ相運可申奉存候右情實至當ト存附候義ハ力ヲ南州ニ専ニ致緩急ニ備其北洲ハ自然襍居ノ体裁ヲ存レ候得万石以下ヲ移シテ利害得失ノ機ヲ緩ク致候様相考申候義ニ御座候

外務省

一魯狄ノ先酋長ノ遺言ヲ次テ彼カ國論ヲ推スニ其西南ニ出ントスルニ英佛等諸蛮合従連結シテ之ニ當ルヲ以テ其力ヲ専ラニ為ルヿヲ得ス即チ策ヲ変シテ東南ヨリ進ントスルノ志アリ其漸次スル山丹満州ヲ壓シ朝鮮ニ手ヲ下シ支那ニ迫リ其地ヲ割キ其正朔ヲ奉セシメントスルノ態アリト聞ク且先年對馬ヲ掠奪セントス然ルニ英仏之徒其中間ニ和解シ彼ノ侵畧ヲ免ルヽヲ得タリ今也米利堅本領地ヲ賣リ其金ヲ以テシペシヤノ人ヲ遷シ我千島樺太两國ニ迫ラントス其所欲領尚北海道ニアリ北海道全州ニ非シテ大八洲ニ有リ尚不饜シテ朝鮮支那印度ヲ并吞シ六大洲ニ狼顧虎視シテ英佛等諸蠻ヲ壓制セントス是昔年来我

神州ニ彼カ朶頤スル所以ナリ恐懼戒慎セサルヘケンヤ奮発奥起セサル可ンヤ此時ニ當リテ僅ニ微力ヲ尽シ草莱ヲ闢キ荒蕪ヲ墾シ徒ニ虚勢ヲ張リ名理ヲ正シ條約ヲ守ルト虽モ決シテ実功ヲ以テ禦侮ノ術相施スヘキ目

的ナル勃海肅慎朝貢ヲ納シヨリ已来
皇風ニ草靡セシ蝦俗ニテ舊府ヨリ今日マテ
手ヲ入レシ土地其実立スシテ中途ニシテ廃
棄セハ天下ノ笑ヲ招シ無止ハ上件ノ逐條ヲ
御斟量ノ上御採用ニ相成且洋人ヲ傭入レ其
機ニ應シ其變ニ處シテ土地貸渡シ民部省ノ
戸籍ニ編シ税銀ヲ収メシメ其勢焔ヲ外ニ表
シ我國体ヲ内ニ存シ北胡擧動猖獗ノ罪ヲ正
理公法ニ験シ彼ノ奸私邪曲ヲ數メテ利害ノ
決得失ノ斷此特堡府ヘ

天使被差遣談判有之度其左右ヲ以テ同盟諸
蠻ヲ卒テ
皇旆ヲ海表ニ翻シ　天威ヲ宇内ニ燿カサハ
膺懲ノ典於是乎行ハレ駕馭ノ道於是乎立シ
彼カ南進ノ機ヲ察スルニ我張縮ノ氣數ニ不
拘到底争端ヲ発セスシテ止ヘキ勢ナラサル
カ故ニ五畿八道ノ全カヲ以テ彼ヲ壓掣スル
ニ非レハ其實行ハレ難ク其功奏シ難シ且樺
太全國出張ノ向兼テ服膺スヘキ才一義ハ一
身榮辱ヲ後ニシ彼曲ヲ鳴シ八洲ノ安危ヲ先

ニシテ我ニ直ヲ取ニアリ小愉快ノ徒ノ己敢テ
任スル所ナランヤ

己巳十月朔日

外務卿ヘ来翰抜萃

任洋丸内艦来着一書以差向候者ニ沙汰
今以機嫌能御承知候段恐悦至極奉存候
僕業ニ漁海業事萬端仕合様何卒安意可
被成下候以手撲東作以積書箇地援援古地之義後
年後産物山野之形状各箇見込書ヲ以
上候写別紙一不申上候
一漢擬出稼山野開拓之儀外寇之憂切迫不仕候
如何様ニも出来可仕候仕向方も古人も不申及

夫ゝ手数無之事ニ御座候得共未タ事情不探索
之候得共何地ゟ流行候ニ付而ハ取遣方仕候
事務(?)而今之風土何地ニ比する作(?)之雪上之風(?)
之有之覚申候

一 魯夷之事ハ情態ニ而ハ申候間一通ハ変
候々手段を以一箇業之様子委細申上候
得共細事之儀見難く候而も大略申上候得
とも猶東蒼(?)八郎 四方之周旋専務ニ仕又者
人之情態土地之利不利ニ至る迄分別仕居候間何分
委細ハ夫ゟ相伺申候ハ当存候得共見一端申上候

一 交際之道之儀ニ付而ハ一際相仕候ニ付金之人之力
手係り候而も必勝之理ニ得候而も輸贏(?)大骨折之
肩摩之義取候之儀如く申上候仕候而も決力不及
して彼方ゟ見合仕候様相成候而も実ハ彼国之
相成候ハヽ彼方ゟ申出候而も彼方之様子撫様事一段之
出申候様可仕候 全権之人之命有之候ハ次第是と
存し全権之職を任し彼之事を裁断すべき
儀論無之総而兵卒等ニ至る迄仕様子ニ而
患ニ而母子酒之如き久しき事小澤々一小渓ヲ満
居候処去年七八月中 様子法家作掛り此

方ニ而指揮いたし不相用候ニ付場所ニ人員弐
百餘ニ而澤山ニ而一旦度ニ預越實ニ伺ニ知寂
ニ而其筋條約第八條ニ基き候通り埋葬
仕候儀ニ而ヲツハ一ヶ所ニ人数或百斗りも
其中ニ而ハ人数ニ寄候者ハ風説ニ従ヒ恐候而
摘葉ノ向後者互ニ懇親を厚し不申而引取
候位ニ御座候

一 右約条表裏有之を用ひ候而返翰中認候通り
文面者條理ニ似たる今日ニ至り實行無之創業
之術遺跡暴ニ候者是迄之總合ニ候

業ニ候得共返翰御照覧ニ而於下ニ

一 右人居宅を離れ出稼之場所者百年来我
国民業之地ニ而其国人之居留ニ而論談を
尋ね候儀ハ無之地ニ候得者其ニ而場所者指し
彼我ニ住居を構ひ新築之場所ニ而ハ勢相
見込且当方民業之地ニ雖も是等二條之文
之如し況や其余之地ニおゐてや右ニ而諸も
実ニ地勢を見立一漢横之荒地を占め候
を急務ニ存ハ其緩急を後にす候之處方
荒蕪之地ニ迫りし哉と恐存候

外務省

一應接之大意是迄先つ之事相接して擾拂
略暴りに至り候之暖簾之縦横して之ト
之如く法を實行之場所に至りては其勢を
遂し一時接觸不致ては接手之間に於ては人之
国を吞食する之策なる勢當然之事一方にて
御坐候間平常之交際之信義を不
失條理を踏先つ雖居之姿に而得と先雖
居之体を致し一ト云致し以て大丈夫に至り
を進め事之觸以て條理を立而合對し
彼を以て接萃條之出に隨ひ無量を得

魯之都府迄迫りに至り一島位之首長と争い
接之事業立之間ニ而確守不接之人を
御座候而接述候交際を成さし先を定を
合せ先兵力を以て實力を抗し以て成さ形勢小
接為不容易接之御坐候而平常之事ニ觸候以
之彼方術中ニ陥り平ニ而保其之急速挽回之
功を立ん之接之是非兵力を不用して而
平ニ而是無之事
廟堂之御一決を依り以事ニ得たる何ニ致是ニ
御平處之而不至ニ而右年存以得て先當

外務省

畢竟之変ニ者何事ハ微力ニ者微力丈ケ奮闘し
それハ予て耕獵之地を占め並ニ夫より外他
事ニ至りてハ事ニ無拠仕儀ニ付何卒勤考之程大
急務之一事存候ニ付而ハ此上御指揮奉祈候
右之條々謹言

外務卿

閣下呈上

齋藤大録

谷元権大丞

丸山大丞

尤懇之ため一発事理御笑草ニ奉備
若御覧ニ候ハヽ手元ニ沼御覧被成下御勤考之
程奉希上候謹言
奉願候於舟奉接之ニ魯夷使復書翰懇
接法卒伴之御当ニ渇望之被の ホーコフニク（魯国漢字）
（第二等相副手六官 人名支那之云）性質頗至篤ニ而応接之座ニ而時
者怒を懐り猶を抑ふることする風之気ニ見へ候
小觸迄者急ニ立辛率之引率する様之老ニ而
右之変ハ小兵甚以之事情ニ不兼騎勢ニ

不分明迄之所業を以て見込來候立
不申候間指扣候儀ハ墳墓地淺猥場ニ候ニ
難捨置事件且夫人ニ於て欽紛不及申
右院之居宅を去り居を移し候事ハ定而異
存不得止事候而應接中ニ入り四時余りも掛り
越候間段々越候旨遂之日暮ニ及ひ夢請取究居
決居候段ニ付申事ニ候而詰し申越候返書八ヶ條
之内追々相済候段ニ得ハ出先墳墓地之儀
夫人殿之欽許致居候得共猶又致相済候ニ付
申候得ハ彼之墳墓地ニ付申候得共道ハ墓之

為之變也墓ハ存之在所道を定て無之有間
之存念ニ付申指障して不用候處ニ居出來候
處ハ墓ニ付是ハ山上夢請出來候事所掛可
申と申是近所ニ而同様之掛合ニ付候而聞又通候
在所ハ入候ハ墳墓を廃し道を造り居を移し
事ニ而當之處ハ不一通之地ニ候人之墳墓
之廃し道を造りすら堂外ニ而道を亂
乃地子之ミならんや墳墓之事ニ而得ハ我到底於
人民之事ニ而當夫人之哀訴を待ん是
等之談判出来不申ニ付様之為ニ兼而熟親之存立

不申親睦和親之国ならんや夫一民を撫育
するハ人情ニ悖らさる周公ならハ貴国之失礼
なからん是ニ於て後ちも人情ハ是非なく政体之関係し
和親中ハ関係すべき漢境之交も殊ニ民之害する
事ある故漢地之交際上ニ於ゐる不都合出来てハ
関彼ハ矢張ニなす事我ハ職掌之通申諭候得ハ
了解すべき故ニ我意情を申通し候様
申出候ハゝ通商之様ニ談し彼ニ向ひ成程
是也段々ニし之尤我差備へ急用ある事ニ候
速ニ以て報知り次第之目しアヒタと見えして

不正要求へし之節申以当境基之地引返し以撫口
上之談判ニ及ひ申し以漁場之変ハ増備へ乗り以
等談判拘泥せす以得ハニ之し延引致以得ハ順次
第に付漢様之始末なんと接致以て先ず申以先
夫の之為我申之事ある引取り和親両国の鋪ハ
申以てハ此二十條程能く談以上よ五一ト之を撫順
申以談話中ニハ空論すへき程談以まて明白ニ但
之事なく以爲測之談しても可て銭来申以何
理ニ基き箇條なる條理を立以撫し成者交面
之取計実行是之返し申以儀程有之候之

外務省

柯太槩覧

三

處〻之合ヲ別手ニ而右掛り次第彼ゟ一ト條
理を踏ミ萬事厳敷ニ掛り之通り彼ニ而内方
之者ニ紛セ候而内方方向を定兵合
候是ニ付而者此處ニ而様を不失居力仕掛
度ニ而都〻小事件ニ而得ト當り動き考申
之大要於相成候者見込中之ニ而数ニ綿ク之條
様即今於而初大政官ニ而諸判ニ而逐ケ候事
以之徴力ニ而厭見退キ中ニ而度来存ニ而高ク中之
於ル而ハ可不ニ而實ニ而諸事件ニ而思召之
勇地之模様ニ而條考大事祈願ニ而早之謹之

柯太槩覧二編巻之二十八

目録

一号 一己巳十月佛人モンフラン公議辨理職ヲ奉命シ歸国ニ付柯太取調申付ニ付テ箇條伺

二号 一同月廿三日岩倉大納言与英國公使ハークス對話抜萃

三号 一十一月柯太出張丸山大丞岡本判官谷元権大丞ヨリ見込建白

四号 一米国公使ヨリ我国北地ノ分界ヲ問合ノ来翰

一十二月右返翰

外務省

五号

一十二月廿四日於函泊尼子外務大録与魯国陸軍次将デーフレラートイチユ對話

附九山大丞岡本判官谷元権大丞對話

六号

一十二月廿五日前同断

七号

一同日魯国陸軍次将デーフレラートイチユ満洗村府へ相越ニ付代任ノ者報知ノ来翰

十月伺

一号

覚

一魯ト仮條約之箇条ヲ遵守シ雑居スルニ於テ彼猥ニ墓地魚乾場等ヲ克蒸スルノ曲ヲ糺問スルノ義

一村落田野礦山漁場等各處区々ニ疆界ヲ定メ繊細ニ全島ヲ分割確定スルノ義

一五十度若クハ其南北緯某度ニ至テモ更ニ經界

ヲ面達スルノ義

一 右之通致候佛人モンブラン殿之儀務理候ナれ共
不日之帰國スルニ付テハ擇方ニ係り右三条ノ内但
ノケ条ヲ取調中ハ不悪就而者御承知
図置度存候也

十月

外務官

佐中

外務省

二号

十月廿三日對話抜萃

一 通接拶畢而

一 摩太之儀者政府相評議之上可
篤ト承候者積リ之安閣下迄中兵庫長崎
辺越之趣而来日之拙者一分丈之聴法者
被下度因変之義者一旦魚國之離在之積
者来相者雑在者若鍵ちの出来不安之事候
爲年之如し摩太全路日本乃地ニスルカ哉ト
境界殊立すり而して来西人武徹役の所存

候して器械の法を用ひ候て山中を掘採いたし
十分ニ其方法ニ致し度目論ニハ金銀銅石炭等多
分出候様相趣ニ相成候ても其当時出入ハ各国人の内何れ之
諸国人ニても坑師ニ相雇ひ採掘いたし候ハヽ役金百
万金の入費ニても右入費利益ハ勿論日本国ニ而割
渡し候様ニ致度儀ハ各国ニても同しく相成候様可致無之候ハ
同しく候趣承り度如何哉

一 是迄之通国主之物品を政府ニ而かし渡候又入費
利益ハ半割ニ取り候事も同しく候得ハ一の政府
同しく候得共出来申候ハヽ自国之事ハ金銀山宗

之自分ニ而掘出し不申候節ハ掘出し候税銭
何程と定メ取建候得ハ双方利益ニ相成り候事
右等之儀ハ要義ハ不存候得共東国人令行哉
建免状ニ請税取建候趣承り込候得共従前ハ
不相成如何哉

一 各国人之内以後右等地所も日本の戸籍ニ入日本
人ニ准シ以建鉱場ニ而も山を掘出或ハ之を地日本
乃国益ニ准し候事ニ而も商人ニ而も御国ニ利
之儀候様之事ニ候哉一体外国之戸籍ニ入候
事ニ候ハヽ右等ニ候儀ニ而も情理ニ立以来之事ニ候

外務省

事ニ候哉承度候

一右之趣ニ而ハ入籍も国ニより候事ニ
相見得候處自国之者一旦米国人之戸籍ニ入
候得共再ひ英国ニ帰り候得者又々英国之戸
籍ニ相成候得共一旦外国之戸籍ニ入候もの之事ニ御座候
英之戸籍ニ復し候事ハ不宜當時改革ニ相成
候處右調中ニ御座候尤米国抔之事ハ五ケ年住居
致し候ものハ同国之戸籍ニ相成申候趣ニ御座候
之候處猶同国之事も一般之法則ニ相立申候
ニ存候

一茶中ニ交り候品ハ政府ニ而改メ中入候ニ付
定め之品ニ候得ハ金銀銅鉄石炭ニ而出候處
日本之事ハ銅鉄等之儀ハ木材ニ而も不宜候而
必ず出来不申候ニ付他物交り候品ニ而ハ出さぬ
候様改め致し不申候事ニ御座候處茶之儀ハ
猶又ニ而茶之儀ニ候ハハ十分ニ運ひ方相成候
儀之当今魯西亜ニ而も人員ニ相増候ニ付政府之
主役ニ而持参之者共ニ而候而能ク改中役ニ而
葡萄酒之如き候処ニ十分ニ精製致し候政府
之政府之議論ニ而曲直ハ有之候得共不宜

積當事故人數も少く兵器も十分ニ不整候
義成者ニして交際致候ニ付積候共我方於て
義ニ者〆も情理を押立候上ニ而致候内如何之所
節者不及處之始末を難計候ニ付事理天
下ニ任せ候ハヽ外ニ無之候事ニ戦争者好不申候
之候内者無論温順場合ニ計り候ハヽ於て格別各國
事情之変方内閣ニ於て交ケ八度〻致旁議新ニ致
府と相成百事變革之際ニ付萬事何分一
事ニ付而も減し候得共不快ニ存候而十分押立
一 於支那之候ニ付積候得者此條合ニ而者厚く心配

致候ニ付而者相成候得ハ中々人数ニ至り不申
一 此中會議之趣ニ而者御内々御國之差懸平大
半無之候ニ付而者御會議之日本人ニ而人ニ無
國人十人ニ一人之比較ニ而至り候而御内方之無之百済の力
不足ニ而比之國人ヲ交易等ニ而道路を掃除排
而者り人気ニ而調候場合ニ而者此國より押付ケ候者も
追續ニ出候ニ寄候而も日本ニ而一旦ニ而當今急
出来ニ付難く雜居中ニ而の致候事ニ付節ニ而如何
情存置致事候而追而此様之趣意を私ニ
而も深く心配致し候而十分ニ此議論迄し

外務省

事理を天ニ任スるの事ハ危き事ニ候、尤於
飯食を鑄碗ヲ陶碗ヲ致御きも当て候ましの
様ニ而ハ天ニ任せ候と申ものにも無之、当今の姿
ニ而ハ九分ハ魯國の方ニ罷写ニ押入候ニ付於官
全島不残管轄致し候ハ・日本ニ而ハ於官
右場所ニ而ハ出人々御遣ニ付事を困苦ニ而
宜しく彼方ニ勝算ニ而始めより見込候而於
右等の儀議論ニ而今日ニ三年前御国論
及之候而は十分ニ可有之存候處當時右ニ而は
可致出来ニ付入費銭於場所ニ向ケ被成候於官

存候、當時唐太の地ニ而ハ西地之ニ雑中於官
御勤番之上御指置有之、於彼方も存候ニ付西地内
減し於官銭御船艦之給致御計候とも
東京中の御取締向きへ夫ヨリ出十分之中二
無之於右土地の地へ出しの鍋も御善用
之者方ヨリ存於路魯西之場所ニ而御地分
大ニ寄る地銭米西望ニ至し候へ共距離も
有之於右御船年ニ而未来不申

十二月見込建白

歎願之見込

當九月已来當省出張之雜載致熟覧候處
之外務之運ニ於テ條約面致遂候ら抗衡之
勢を張候事ニ而疆界致画し雑居致廣候事
之實事難致行議論喋々自然虚實之
属し候も不畧成候而壓滞候事録勢も不足候
駁雑予望之手段廣東湯之如ク相成多く
人武を務し於予候ハ口筆末致了之證之

外務省

於テ武家專招ノ運モ終ニ土崩瓦解シ實ニ至ル
冥鑒ノ名立テ次第招ク名義モ一國土ヲ新ニ
立テ出シ處實ニ我可ト招ク處ノ當リ自ラ他外藩ニ
著シ如何ニ至リ於テ斷然ヲ勇決ヲ以テ古
來ノ名ヲ廢シ一途ニ定メ於テ立テ一年ヲ經テ八道
以テ為州縣ト長官ヲ置キ之ヲ建置スル遍ク出羽
ニ於テ奈良ヲ南北石狩ヲ置キ僅ニ換税目ヲ
立テ直ニ縮據シ經テ當時ヲ尤モ堂上諸侯ヲ
封建シ悉ク我ガ中ノ用ヒ當州ノ事換ニ換ヘ
首尾ニ於テ一様ニ其事ニシテ當州ヘ於八州ノ全

外務省

力ヲ以テ厚ク之ヲ附セシメ於陸奥ニ鎮守府
ヲ置キ以テ蝦夷ヲ鎮撫セシム數年ニ移リ將軍ノ名
有ル猶未タ我以テ継ギ古ヨリ太宰府ニ鎮西ヲ當
テ大宰權ノ人ヲ任シ而諸藩ヲ統テ亦更ニ陸奥
諸伏人ヲ農兵ニ為シ軍團ヲ置キ各小宰權
我親シク奥羽ノ内ニ移民米十万石ヲ於當地
方ニ附設シ運送等ヲ取ラ護搬運ノ為ニ往返シ
於是諸貨物漸ク集リ諸富商大家商賈寄ル
往ヲ出シ居住入方役 彼ノ外務等招合併合計
出納營繕細漢小分課等ニ就シ其應シ於テ

精実ヲ以テ之ヲ選ヒ其長ハ先ツ中納言参議
ヲ以テ之ニ任シ其次ハ其人ヲ用ユヘシ総テ言語文
字ニ諳熟スル者ヲ其管轄ニ任シ事実ニ其選
不可無之故ニ今是ヨリ能々選擧シ且
山海ノ運利ハ富國ノ一大要務ナリ諸般ノ事
ヲ兼テ之ヲ統轄シ之ヲ運漕シ其事務ヲ処理シ必
定規ヲ設ケ號令ヲ正シ皇威ヲ恢弘スルノ基礎
將来ノ事ヲ此ニ立テ以テ上下ヲ厳ニシ員ヲ定メ

鎮守府 以鎮台為之

師

大弐	少弐	大監
権大監	少監	権少監
大典	権大典	少典
権少典	主工	権主工
主船	権主船	医師
譯官	府掌	

諸郡吏

大領	権大領	少領
権少領	主政	権主政
主帳	権主帳	郡掌

外務省

使丁　直丁

軍團

大毅　權大毅　少毅

權少毅　主簿　校尉

旅帥　隊正

一當地軍務之義ハ魯人ト軍ヲハ爲シ難シ皇國
ヨリ軍ハ至テ易シ而ルニ柔弱ナル故魯人ニ及ハ
ス恥ツヘキノ至也魯於其地環ニ於ケル其地十分ニ
三ニ處可謂大ナリト雖モ其人武備未タ其鋭
用暁實ノ地耳ニ於テ而ルニ之ヲ顧ミス此頃ニ

夕ル様ニ而顯シ候ヘハ軍望致候事ニ在之於
テ哉ルヘキ也我領之テ魯西亜ニ於テハ其地圖ヨリ
小縣之國其人武威多ク至テ其業居中ニ於テ致モ
甚キナリ然モ而ルニ如是要衝且不足ノ地城以テ
也ナリ期殺ノ重要致シ候事皇國ノ汚辱之ニ
過ルハ無シ故ニ以テ是迄之通事ヲ以テ及欲致
其首領致候通事之件ニ而急ニ運ヒ候事於欲
被遊候儀ニ付亭主於御一應不致合之處モ
可有之候通事之件ニ難致爲取於御之軍招
此節出来候通主於御請宿致置候徒ニ當地ニ罷在

外務省

右之通リ出金我費ニして於事も無益且恐多ニ付
今之略未詳報ニ不及更ニ諸方買入引揚ケ候處
物誠ニ仕末ニ付當委細之儀ハ當館大臣ヨリ
少輔殿ヘ寄贈被遊候様奉希候　頓首拝具

巳十一月

谷元権大丞　道之

岡本判官　文平

丸山大丞　作楽

外務省御中

外字通弁書記官政治出張之處建言ニ付

米国公使ヨリ来翰

合衆国ニ而アラスコ並ニ近傍地を該国ニ而魯西
亜より買入候以来同地産業ニ付漠然大ニ撰挺
ナリ候ニ付日本政府精細ニ申調ヘ之様存候我政
府並ニ産業経営之事ニ付其国之境相
之様ニ而其地産物等差越し被成度候以上

千八百六十九年第十二月十三日

合衆国ミニストルレシデント

シ、イ、エル、デ、ロング

東京

外務卿閣下

十二月右返翰

貴國第十二月十三日附之書翰落手致し我政府ハ
魯西亜ニ對し境界ニ付協議被成候趣ニ付擇
捉並ウルップとの間ヲ以テ日島及ひ其他ノ方ヲ
志るクリル諸島ハ魯西亜ニ屬し擇捉全島及ひ
其以南ハ都テ日本之所領ト擇捉島ハ分界未
定ニ付日本人民雜居之地ニして日島ハ双方之管轄
可有之旨右回答如斯御坐候以上

從四位

已十二月十日

寺島外務大輔藤原宗則

従三位

澤外務卿清原宣嘉

米国公使

チヤルレスイデ、ロンク

閣下

十二月於函泊對話

一通り挨拶畢テ

過日據渕ヘ罷越候處種々謝絶致候中述能ハ昨日

阿部大譯生ヲ以テ中入候通為相合丸山外務大丞

岡本監輔判官並元外務權大丞始メ池三四人

午上陸ニテ被罷越候處右為案内拙者両人罷

越候處英八丈（米利権壹艘）右蘇米子ヘ印テ拙者共

相勝候ヘ入細ニ見候ハ一同満足之至ニ存候

昨日従績寝中上候通丸山致候處十二字ヨリ貴

外務省

外務省

階級下至於趣難有奉存候得共當節於御入用急務ニ候處
内府ニ於テ未タ其程ニ至リ不申候得共且莫大之
御品ニ候ヘハ此度拝借ニ至リ度旨ハ京都ニ於テ厚志ヲ以テ此度モ奉願
謝ス此段何卒私儀ニ被渡下度御聞済被下置候様仕度御用捨之儀ニモ相成間敷越
於テ付テ者當節之間柄ニモ此段ニ至リ候ハハ於テ御所ヘ於テハ御沙汰
之御趣意ヲ承リ於テハ如何ニモ可致候此段於テ御所
至急奉存候於テ拙者ヨリモ右之御沙汰ヲ承リ度候ニ付
申越候向ニ於テ通達仕候ニ付此度出稼之者相往来致し
於テ付其段取締ヲ申越候ニ付右之趣逃亡之者不越難中ニ候
来書ニ申来ル人 是ハ英国ニテ渦流ニ製作之図書ニ付受取仕候手紙外務大輔ヘ 一書出シ

英仏文ニ而相認候様欽慕滑節ニ相成候義ニ付早々
毒ナル趣ニ付此度大蔵中ヘ御渡シ律ヲ以テ取扱
入候義如何ニモ可然哉
交易之儀ニ付是迄之処ヲ以テ向後之儀
右寒暑ハ勿論難渋之地ニ付此度右之儀ハ実ニ難
渋ニ付右ヲ者如何成共ニ於テモ不申旨被仰付候
外国人ニ於テハ何方迄モ於テ上陸致シ居候ニ付
之儀ハ兎角之事ニ候

此書記付中部午下辨ニ至ル九山外務大丞
岡本一等招副安保元外務権大丞及鄭大得大蔵

中澤外務大録副田外務少録等附添来臨
府尼子外務大録等ハ手嶋著ニ付旧道ヨリ出迎因
外近藤出仕花房ハ後ニ西陸軍将手嶋著島
津及ヒ米総兵入江高田為総医師ホ列座鄭大
訳及大築中澤等傳語

一 通ヲ接待ノ事
当九月来吾等出張ノ縁ヲ以テ事ニ寄シ一偏年
主業快復ノ末吸去状坂寛勤ニ偏シ川続ヲ
参ル之談識細討シ夫外交事新ニ迎来 年之六
年〻我ヲ縁シテ悪誌宜ニ及ヒ於付ニ於テ

速ニ幕府ノ秕政弊事ヲ一洗シ急以維新
ノ大典ヲ設ル事
皇綱ヲ快復シ清朝ト大信義ヲ以テ友誼ヲ広通
ノ交誼ヲ遂ケ交際ヲ設ル事
清朝ノ事ハ本上ヲ繰約所謂人情世態ニ不恨
向ハ悪法ヲ除テ有来ノ弊ヲ去リ旧習ニ泥ミ傲慢ノ
莫ヘ例ヲ有ルノ事ヲ許ス我ガ版図中ニ絶海孤島遼
遠ノ地モ有ル処ハ巡按使ヲ設テ送リ付
州ニ法ヲ為シ甚シキハ漢人ノ所謂化外ノ民トシテ小猴又
異類ナト名称シ其人ヲ以テ因テ擬ス言語ニ至ル

外務省

素ヨリ悉皆我上代之遺俗淳風ナルニ存シ
皇化ヲ被リシ
来制ヲ定メラルヽ以来未タ情ヲ尽シテ欲スル所ニ海外
之人種小進精錬之勢ニ被迫ル人モ有ルガ福祉
シ且先年幕之奸吏官家之許可ヲ以テ去ル
令権ヲ私窃シ條約ヲ取結ヒ未タ内外之紛擾
リ自然ト法違之筆録ニ発端シ其一洋艦ニ
殺サレ情義ヲ欠キ搭載ナル以テ外之侮ヲ受ケ
ニ発狼和親睦ヲ以テ為スノ情好密ニ至ル運ヲ方
迷惑之為ニ拘ハ天理人情ヲ斟酌シ交誼之道
ヲ保全セシメ玉ヒ
主命ヲ奉シ着後事情能ク遂ケ従前ヨリ日本ニ入リ
子ヲ以テ瀬ニ於テ年ヨリ西洋ヲ講述ニ被許年来
此事ニ就キ
難キ旨趣ノ言ヲ以テ能々旨路ニ其實ニ奉リ候幸
予テ御用事ニテ被仰付此歩聞ヘ左ノ
生ニ於テハ其者ノ所方ノ病客ニテ当人経験ノ
為是非被為候条被成旨
我方ニテハ東京ニ於テ医員ノ手当未被
其者先ツ可致手当所有危篤ノ病モ相節セ

外務省

必至ニ相成候間深情厚誼候
諸君ニモ清来臨之儀ヲ宜敷御頼申上度
之返一筆致候
今日ハ一通リ之挨拶茶除之處味ヲ右今日
先ハ追付之為不取越(俊)付譜除之候
右断中致候ハ秋以来當藩大録同件之鄭
大蔭宰致之外出掛親之眼ニ厚深重
頂戴是有之尼子大録互揃申付若之至
候右手追見史ヨリモ可致中立候
被下呼見発途之頃ニ拝遇ヲ致度之可致

外務省

實義ヲ以奉拝候親子ハ此處ニ被候御申
於未墓所迄御通路ニ付而ハ難出来漢営場御戸
付立而之一式利為通致候
墓所漢業場所ニ而ハ候人情語業ニ大学候ニ御座
家等當候早速出人共熟談歓談等再三再四及
處ヲ柳孝子悲歎ニ而モ折々泣ニ而涙ヲ流申候
是ニ而ハ其情義ヲモ捐木ナシ霊標立候ト
拵而且立置之筆而ハ被為掛候様ト判然ト存候ハ
素ヨリ之様當藩大録等夜霞論所之表筆ヲ
相勝便宜ニ追付替来ニ可致ト完成候也遺ニ而引拂

外務省

事且漁業場ヲ定シ不妨碍ハ不相拘候之義
彼條約面ハ殆ト至當ノ事ニ候處自然ノ中分
第八箇條尚我談判之通承認候得共一應之處
條ニ起リ候事ヲ不相成為ニ依テ議致シ候ニ付
兎角不相成候之中分ニ付
筆ヲ写シ候ハ殆ト無之事不申上候得ハ何分之處
法律ハ彼ノ意ニ依テ遠ク不及ニ付
而已ナラス時譯次第御判斷可有之通弁モ可有之義ニ付
横暴之所業ニ於テ人ヲ中ニ出シ候得共尚又入路更ニ
押張ル義ハ一個人之遠慮ニテ不可然義ト存候ニ付一

支那ハ地球上ニ於テ殆三分之一ニ蟠居シ殊ニ無比
文明開化之師表トモ可称支那之文明ヲ以テ寡
独立之勢力ヲ以テ歴世天地之心理
有之候や
然ルニ近年モ我ヨリ之モ兎角常ニ恬然トシテ小
忠臣之彼條約ヲ固守シ其上何分主張シ
近来ハ殆ト無之
彼條約彼是論シ立テ候テ其意家小清國ハ吾嚴
國旗之下ニ於テ我ヨリ山丹満洲古ハ勃海粛慎ト
称シ皆我ニ朝貢献納セシ事古史ニ明ナリ中世

外務省
外務省

藤氏并権謀家等府より以来
王綱紐解き自然殿邑方去臨ニ
皇澤之數ニ至リ終ニ遂ニ幕府執権中数件
之大不厚之法外ニ押ヘ候能ハサル者有之シ通漁ヲ
ニ運ヒ中夜不情ニ至リシ者小出来ル者有之筋只今之候
條約當席ニテ取發足ル義ハ決シテ無之又ニ
方ニも権ニ有之も不存條ニ付條約調ニ成リ
且諸事ノ不決ヲも取并因盟親睦ノ情好を以テ
全幕府因御之眼目を以テ挨拶申上候事ニ速想
存在

此道理千萬ニ付入之御事ニも濁流梨ハ引替可
中出来候上ニ出官有之ニ付テも又官長有之全権筍不
可寫本ニ付申候
其之情実能之事ニ不交際上ニ於テ外人之小嫌
疑ヲ生シ自能争有之取態ニ立至り苑角双方
在留外国人之事ニ到底ニ於テ交誼保全シ
道ニ而我條約取調ニ要論ヲ以テ彼不情ノ
陳ヘ疑惑解テ信を堅シ其後英佛ノ
親シミニ至リ彼踪ン等ヲ折テ実ハ所存込ニ付テ
決シテ之ニ備ニ其之幕府佛ノ信シ

外務省

天朝英を用ひ候ニも皆窮理天文醫藥方術
製造器械之実理技廣求いたし候儀ニ而学
術探討講究致し實事ニ而所ニ而運ひ其術ヲ
試法ニ當し官家之妨害不少候ニ付
天朝之儀ハ当路ニ程之事ニ而
朝廷ハ格別ニ一圓之内情ハ總而海外之事情尊覩
ら早くし就中ニ而好技明ひニ而内を嘆んと為し
之る續く程之縁ニ而漢し而親誅彼是乃弁来
し而節ニ而我を察迹するとも以て英佛之悪む事
二而所ニ而未藥稍学之実ニ而一層盛とかくし

能々にも先年来對馬一件之儀ニ付何とも當惑之至ニ候
之到厚遣し而実ニ不和ニ而戦争ニ及ひ和之理致講し
後患我對ニ而し遣西洋之國之歡笑を免れ申間敷
義と存候ニ付尚又右之儀務ニ而有之候ニ付
吾ニ而家務ニ而不可止候ニ付報告仕候 君ニ而も承
君主之儀掌握を寄せ候し而ニ而持支ニ而之ニ而義
其能ニハ明白之禮式も有之蔑遮一旦延引致し
其ニ而致出候ニ付禮法被之事ニ付
何ニ而ても厚情ニ而枕事将程暴を稿し候ニ付
引取候ニ付

外務省
外務省

従是丸山外務大丞初談并〔?〕意〔?〕

鐵後鄭大譯與大藥中浮安居子大孫〔?〕

大譯生命子信安孫等語大藥中浮安〔?〕

話

今日ハ不計大勢様御来臨被下丁寧之御意ニ預り

手前茶存候 当丸山大丞初ゟも宜御謝申上候

折角御入来被下候処御愛想も無之

日積何之風情も無之於此御満足ニ存候

尚上ハ当方ゟ可然御挨拶も可申上候

明日筆上可仕候

先般丸山大丞ゟも申上候通 拙者搬下小笠

石崖之後ニ当方ハ必しも拝見之儀被成候

此度道筋方ニ標木建置候場所迄ニ

此度標木建置之道筋方ニ標

候ハ人々之存念ニ可有之様致候

道筋建置候積ニ有之候

此積ハ左様之事ニ私共承知ニ存候

致標木建置候事ニ候

御史ハ当方之指図之事ニ御座候

家方ヘ無断建置候而ハ茶ニも中々

外務省

外務省

於右ハ異係之事古今撰ニ不得之儀ニ有之候ハ
実ニ両国好親之情ニ皐然相破候勢ニ至
り候事之情実不容易次第ニ御座候間可成丈
於此処は取扱之儀を以て御答申上候而何卒御許し
実以不容易義と奉存候事
標建留候儀ハ落外岸抗路私方ニ而差出し
標建置候事也云々人私方ハ無許撰ニ抜捨候
可申哉実之儀ハ当方ニ而手附置候場所之是ハ取置
国人より標建候事 右 抜捨之事ニ候
落外之儀ハ一旦右取扱申之候及右候通 家方ニ而 抜

捨候儀ハ無之筈 当 撤ニ被抜去候趣 当山実之義ハ
一応追而方之手附置候処又不遠ニ相偏置候
出来程之所据置候而候處ハ一体私方ニ而三
年前ニ而差出し置候事ニ付候処其後両方ハ何
候得共差出し候様之儀
何時ニ而も差出し候事 中 撰ニ無之一体 ハ
家国凡八百年ニ古源頼朝之申立し人ニ而
上之相家之事 落来住居之人之言語風俗ハ
勿論家古之風ニ不変全く家国之地ニ而候
年月を不論やや相係ル色之角ニ業相成候而相違無之

外務省

有之候
右様ニ付テハ何ソ標杭建不申候テハ私方之所有
千八百五十七年ニ布恬廷之條約ヲ以留候以来従前
十三年前ニ私方政府ヨリ莫大之入費ヲ掛ケ鉱山
家を遣シ見付出シ置候事ニ付標建置申候
ハ堅ク法度中ニ有之候
唯今御申聞候通リ金銀岩坑ハ素ヨリ家国内之
者ニ於テハ何レ之標木を不建道理ナシ縦令旧幕
之小吏小出大和守ナル者法律を破リ自己之所為
を以府雑抔と云事哉許諾有之候トモ右ハ当方ヨリ
工民来リテ坑ヲ掘らんとして家漁業を妨或ハ網を
破り家之岩坑へ手銭階杯不埒之座のミ多キ折柄
王政御一新ニ付雑事擾乱之義是山ハ素ヨリ家
国之岩坑是地ハ素ヨリ家漁業場ニ至迄標
杭建候ハ山事ナル故諸事ハ不遂ニ付須手を下し
候事ナル処此通リ之次第ニ候へハ早く如元ニ差返し方之
標ハ撤去致シ撤附ナル家方之所有ニ程仕候也
何之新候ニ於テモ私方之所有ハ布恬廷之條約
を為当リ且家国王之命ニ寄リ取扱候事ニ候へ
自己之為取計ヒ候筋ニ無之候

抑ゝ利害ノ失ヲ不解ニ付速ニ武家モ因シク我
天皇陛下ノ勅命ヲ奉シテ来リ居リ候処
利害ノ失ニ不拘ト云ヒ暴ト云フモノ也
私ニ入リ候得已ニ卿ノ咄ニ於テ出来不申夏ハ渭説
顆ニ候得宗ニ於テ是ニ而猶ヲ申於テハ相揮爰
如何相成可仕候
右様ニ不解事ヲ積ト申程ニ付遣ニ云ハ言ヲ申ス
貴ヲ邑ニ於テ不以ヲ申候ニ付来ル哉可待尓
直接草稿談ニ来不申候而一下院も差上置候
林ヘ思語出候 後ノ事ニ付御座候

抑先年丸山大通リ中学於通墓地演業場ノ
咄ヲ申上候同所一覧可被成候
右後甚ノ於テ是ニ御座候許限も於後ニ付中々思
恐入於テ右ノ以テ五官於字等来テ楽不能候而致
申行以相行可申上候
右様ニ於テ此先可被成候
余ニ談話被下場来仕候事ニ付其候

十二月廿五日同断

一通り挨拶畢る

昨日約諾之通り存韓人は致しく於て昨夕今

同伴墓地并ニ漢業場等へ参り候於

就右ニ従ひし山手於て同所同伴申候

史ト右手綱营等津同行右墓所の許

遺ニ承り

波散を揚なかし墳墓ニ当消ニ當人蘇蘿を

設幣當兵ヲ以附置まし墓上之道六歩程

外務省

且此幅を以而右場へ出道之儀還より仕立趣ニ
候処右者御差支ニ付可被下旨申立候
家来鞭を揚而云如此囲破候者何之園中ハ皆
墳墓之地ニ而是之霊蔭を破り従還之筈候
右様之儀ニ被致候而も不相分訳ニ付被山此山之宮
平地者人之調干場ニ而尤大切之要地ニ御座候
然ル所右等之道中立難く候ハ彼是不都合之儀ニ
相生候ニ付鐘へ接待篤与談論可致候
来営之趣被差出候彼是文ニ而漢葉場之ハ法坊
仕申可見候

右之通同鐘中途ニ而談し候処右之墓
柵之内之墓文如何之深本之候得共承知不致
定而是者迅速ニ而掃趣之旨申聞候
右之趣同行曾爾路其之接待罷在
昨日同行接客之通掘之墓柵を接取り従還と
申し立候ニ付右為業等ハ無之旨事ニ人而
候処右墓其起之事ニ而直ニ可被掛合候旨自然交
際之儀ニ付破り可申候事
必墓之道ニ附不申中候
前之も申出一囲中之儀申上候句墳墓

之地有之事ハ無之候然ルニ外人之埋葬地ハ
手薄ニして田来踏リ来墓標も少く三四十年
を経候而ハ墓所も無之難きハ必然ニて一圓之
荒廃之道路と致候儀ハ右様之営業ニ致
候事ニ有之自ら訪く原文力も無之渡世衰微之情
之有之ニ不思将来ニ至り候儀無之此情実を察
し速ニ新道を踏替ニ不相成候
如何程御申候事も彼地ニ墓上之事ハ無之
元来新道ノ為ニ候御当人ニ而為致候変更之
変道路附候事も何の障り無之候右中候は

道路取リ付候ニ付候而ハ何分変更ハ不穏当ニ思召候ハヽ
右外人を御家ハ同為ニ而申候
右様之道を申候上ハ無論之上ニ五六人リ定人も地を
堅て持置之有之場合探索在之申候
中之右様條約ニ事ハ致不申候
尤程難作り道有之無故致事ハ拙者
ともえも難出来候へハ此辺之思召ハ天地間ニ生し候人
人情有之候者ハ情ニ於て祖宗之廟墓を存る
事あらんや故ニ外人之懇請ニ従ひ能く確證
如く此是大切なる墓地を無論之外人ニ當る人之

外務省

言葉を以候道路ハ蓋其方之誤なるへし一体如是
場所へ手入致し候而中通り之地無切探索
之上作道致し候ハ双方行違之思ひも無之よしや
致し候とも敵謀手段と可致ニ付愈も墳墓を発き
宗旨ニ而邪法蹈躙をなし又埋出候者を殊ニ言語同
断之為業ニ候へ者何分ニも沸騰可致候之
積り候ニ而来ル道路を備而和睦之信義を破卻し
可致旨存候
年来堅固ニ宗旨ニ有之由ニ候へ共外ニ而者
取出し候蹈躙ニ其儀之義ニ至り候宗旨

之儀共斗中止致通速ニ取掃可申且右
右之路傍墳墓之ハ一旦諸沢并落籍を設ケ
番兵を付置可申候得ハ可然存候
右取計候而如何取計も道路被閣候事ニ不相成
候哉

政府之命之儀ハ作り道之義ハ是非致可事ニ無之
可申候

政府之命ニ致申候ハ、拙者ニ而なき候ハ難從候而
右如何之之事ニ候へハ政府之指揮如何程ニ
而候共道路之指揮ニ而如何様存候而命ニ而ハ迷惑も

外務省

全権申立ハ道路附替候事致度計ニ候ハヽ宜敷
存候
併シ只三十年前ニ勝山家より指出候地券を
以此度平作道可致候所勝手ニ候而ハ実ニ
難致候
其勝山家より差出候地図之内此墓地之儀
事ニ不相知候ニ付其事ニ存候ニ付此道明治三年
上タル之事ニ候処其段ニ付上ハ界而道ニ相成以勘定
候旨ニ付此上者兼候所承候ニ付其ニ料中通
吾国ニ而ハ祖先代々之墓所ニ而由緒を経候ハヽ

之其牛馬之通路ニ為致不申候間只其墓ニ為
其自然不得帰候而も難中ニ帰ル時ハ祖先之墓上
ニ牛馬之足跡不容易時ニ者子孫として
実ニ其祖先ニ対シ不仁之情実を嘆候事ニ存
其道路ハ全権ニ而早速取計可致中候
墓地を除キ道路を付替候ハヽ大ニ不便理且
湿地ニ而夏ニ至リ候而ハ往来難成候而ニ付
難致候
不便利向之儀ニ付候而も其料も夜中通候時
実ニ其不便し湿地ニ付堤防を築立候様致し候

右線中之人民莫大之大費ニ而容易ニ難
整候
其程ニ而入費莫大之事如何ニも恐入候得共
再三再四申通候得共実情を弱不費用錢
不顧事之所致哉ニ而者其国之厚情も有之窮迫ニ迫
之儀當年も有之常ニ雑候時ニ者當国之者も自然ニ付
方政府之寛恕之御處置下し置民之流厚く有之御座候
云事ありて尚も熟察有之度候
政府之命ニ而何連ニ而も難致候得共至極
候也之次第右當御處置ニ付遇々清釈被下候

若當致候宜府當ニ相談し候ニ付度候
拙者共ニ而斟酌之中入候事件ニ付其所存ニ候
上者政府之命を以之ニも速ニ致兼候得共
之理ニ存候
候儀ニ付而ハ政府之命ニ而背ニ者相成候ニ付
當館を以家中一統殊ニ被成刑律ニ所変
候ハ必然之者ニ而も不届被致ニ而も所存付候事ニ
可有之ニ存候
我國ニ而者古来より墓所ニ而候遺骨を写ニ候ニ付
皮之不命其地形無案内ニ而者命致来候得共

右等不都合之事件等及候上ハ一己之浅識を
以速ニ可取極之至当ニ可相叶西郷四五郎熟考を
郵便ニ而橋本ニ而西郷を以報候段候へ共是迄も右
立所謂四方之使して君命を辱しめ不申儀ニ付
節ニ可貴言とも可致事ニ候
言葉ん之之ニ而附被帰候之ニて迎出候渡
伺来ル
何程話御座候ニ而も私権之不及所ニ付右之先斗
中上候通濁浅斗辛行へ受候入段下度候ニ
様上候

今朝之約束之通横浜へ入来ニ而来着候
十二字より篤と談候
先斗之之稼之談判段候得共右之筋之様之不及
電高之ハ不得止事候旨右之迎逓一九山大逓始
節ニ当且右筋迎入来之御も拙者へ返答之迹
右之逓之之ても当中迄ても可之候
畏申候
右早ニ退出
強年下牌之臨時陸軍総督之事
津及ひ本隊長入来英第二醫官某来

外務省

三員答礼之為請来ノ家通ノ家監察局
設席丸山外務大丞呂宋下ノ招判官各元外
務権大丞尼子外務大録生駒外務大録大竹
外務権大録伊東権大録川為外務権大録
中村外務権少録広田外務権少録等列鄭
大訳官大築中訳官河鍋大訳生清語請お
之応対如左
今日ハ何之風情も無之候得共使者等之無事ニ茶及経
殊中国能行届兼候義可有之候遣御断
置候能ハ此日多人数罷出候之饗応仕候

厚御労候
法據揃入候今日罷出候尼子謹而法
請書法為罷出候
昨日到着後訳官并尼子大録ヘ山実崖條之件
今般墓首通路漢業場而戸場築之儀ニ至
政律上之趣ニテ一二通答之難及後来之中出候之件
今更幸之事々談判ニ向候元来交際之根立
幸不幸之補助ニ候義ハ今一天理を重人情
を破候事之基之和親不相立蹟墓之事
件之人情難忍大事柄ニテ宗家談判上半出

も難出来候て天理ニ叛き人情ニ戻り候事も無数候
所如何能々熟考可被成候
士人を呼出し能々相談申度候得共道ハ対話段
此後兎角由命を受度存候間一己之了簡ニ而
出来不申候
右ニ付君命ニ從て各其命ニ従ひ候得ハ学ニ
有之事實ニ可論之事ニ候去君命を天理人情
有之封猶有之好親を破り候後更ニ可有之同意
信義を専一ニ被遂候様ハ我
天朝ニ於て最も何ぞ從て交際を爲さんと命しらるや

就而者泊戸場之義如何炭坑之件今一應御底
之協着可申向候
彼炭坑者千八百五十七年英吉之費用を以鑛
山家ニ備へ見込有之此三年前ニ掘掛り候義
ニ有之貴國之摂制を受候義ニ就て者標木
等被立候義不得其意支那私中付合捨
申候
彼地炭坑一箇所ニ而も相済候ハ、不相成様被申出
張り立候得共素彼ニ於て殊更ニ見込有之候場
所中程之義ニ而首尾先年より炭石跡畔

外務省

ニ磯竹現出シ幕府執権中モ承版図ゟ
除テ以別ニ彼是シ標ヲ立シ候事之其他全
國ノ標木事之諸坑影多有之則其方ニ先
年ト識ス書中ニ実於テ事之のミならず山脉
連亘シ地於ト張相妨ゟ迷惑ヲ以テ音函
泊家作墓置漁業場之妨害ト可被呉候
就於夫ニ指文ヲ相和熟談判情態斟量
有之候様
何分モ彼等ニ岸坑之氣前条ニ部示可
申上也ニ熟談ヲ難及其他之件モ急角申

之ト云亦然隠シ大要戰聯絡尚國而
諸事数年ニモ一ノ及ビ
最早数年直ニ到云可ト一同モ交替ニ相
來候答候
帰生國ヲ何等
本京ニ至シ今日其方ニ煙見程ゟ通此の中ニ
忌避シ九州ニ永ク禁錮セラレヰ加此
次ヲ至其方於迷困ニ就一ノ事就ト告要義
右候
痛笑シテ云此山泉ヲ何歳於大要始思ふ

外務省

谷元尼子單に及且生国を問
名姓實を以て告く
本年を賣女を達本に移して答且貴
所方にて商店ハ如何
本年回様に見込に有之候實ニ如何ニ必
定て難計候
何分此義ハ未た實事御書面一の有
之拙者ニ於ても工匠に於計りし此義ハ
如何
家北海道を雪國と稱し是等義候も算り

之れ氣も到り候丈ニ賀楼ニ人物のみ有
之ましの盛成とも不心得ゆ及ひ候ても清能
手段張家ハも此儀まして病手に於身中
於術學志と種京御身に於
此迄通所至小肝膽を吐露し論争を
至極ニ付併數年ニ及を戦争ニ至不知
八居合中宜敷於
然るに情實能其家ニ其国ニ中宮一種
之出人有之根と存候得とも商出人を家送民
又他国へ条約ニ於ても

凡天地之間造物主ノ神造ニ属セル自然之定
理ありて大を以て私なる事能はす小を以て
屈せらる事を得ぬ宇内普通の大法あり故に天
相互ニ草業を開き出地ニ任し天功を全し
地力を尽して無き事なれは自然主客自他
ニて無なくハあるへからさる理を立迄する人民の妨
害致間敷之上ハ如何則条約書後政令新
立之時同盟好親之間互ニ全権斟酌を立
只管両国之情好を全し寛宥ニ取扱
在在ハ両政府之筆并を御示様来而候

外務省

双方ニ於て取扱ヒ在来之處置ニ而手を下さす候
様之儀ハ是亦兼而無之実ニ法外之義毒手無之恩
思召可被下候
昨今より談判之諸件一向ニ調不申故方法
之仕合併自是一先ニ何事も談判可申入候
得共天理人情を斟酌之候而実之事故其
處之事向取調各自之政府之委任せられる職務
を遂させらるへし外取則吾ハ僅出先ニ不全
権を以両国好親を継之不忍是我
君ノ厚する所を以て其辺ノ天理を私さる事我

外務省

人情を鎮るに不能故に小実炭坑ハ一ノ用
ニ節堀之墓所漢業場鑓を残務之実
保護し名を立置し且其辺ニ妨害ニ存
故ニ鏡玉を飛し剣戟を弄しも吾敢て相
抗し且戦ひて好税を缺く事を不安従容
義ニ死き捕獲禁囚を免とさる処なり
炭坑しむ是死ニ不及次第承知仕候探冷笑
ニ仲まりて夫より諸件ニ付を以而しかれども其談
申立難ニ至らし家を戦残を奪ひ去ること
如何ニ而も不来以て此事を以腹膺一つなれば

夫而は此方心得方も有之委曲承知致し
来年に至産まん銃を進呈とくし定る夫
まてし家宰を打玉ふ迎し
真心配を致次第にされとも即る家宰し命
望ハ縲紲ニ准ひ可有之夫まて捕獲し置
くは家族務も其所を致し度志願に事を
相成居申候

右談判中ニ有合之酒肴煙茶等を備へ酔
を盡し去らしめ各退散即夜同席ニ於
て判断した談判之見込等を致し尚官之諸

外務省

官員總テ呼出シ三官列座シテ上布告

中酒氏事

七号

ボウコーニング涌港ヘ相賊ヨリ諭報知

サカリン島を支配せる首長より以第十七号

書翰ヲ以る七十年第一月十ヰるカルサコフ

陣営ヨリ於て

サカリン島日本人住居し首長ニ望ハ

一拙者國用有之ニコラエスク府ニ暫時居職ヨリ留

而分貴邊方ヘ申入置ニ拙者出府中而島狙下支

配并大砲隊カヒタンホナカリヨフヘ任ノ条第一出カしくて

候も有之ニ付同人ヘ以引合一之承り

外務省

一母子泊上瑣細ニ関シ事件を決談する義ニ
四隊長カヒタンピニンへ拙者ヨリ権を任置候
一貴辺方より決談し道を開き漁業并ニ海岸
掃除其他石炭場を拵し及ニ総理辺疆事
務官ニ勘合を預ケ拙者ニ可相極候

巳十二月九八日

陸軍次将手鍋荒為津

26677